

俳句雜誌

令和四年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第五号

水 月

2022 5月号



《今月のかな女》

衣更へて鼓とりたる肩まろし

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

更衣の季節を迎えると、身も心も軽くなつたような気がする。冬から春に移る時はあまり感じないように思うが。さつぱりとした装いに改めて正座し、小鼓の調べ緒を左手に持ち右肩にのせる一連の動作に無駄がない。革を打つ右手五指の自在な動きと緒を操る左手の動き、そして、「ヨオ・ホオ・イヤー」の掛け声が実に佳い。鼓の稽古場風景かと思うが、「肩まろし」で、小鼓の奏者がかな女自身とも思えてくる。

(鬼之介・註)

水 明

第1100号

— 華の一句 —

蜆汁口割らぬ奴二つ三つ

梅 澤 輝 翠

所轄署の取調室。厳つい強面の刑事と優形の刑事の二人が組んで容疑者の取調べをしている。前科が幾つかあるしぶとい男で、のらりくらりと話をはぐらかし、なかなか口を割らない。

朝餉の蜆汁の椀の中にもしぶとい奴がいて、かたく口を閉じている。何が何でも抉じ開けたくなる頑固な蜆である。

(鬼之介・推薦)

水 明

令和 4 年
5 月 号

今月のかな女

華の一句

ときめきの川 (作品)

近 景 (近詠)

半 身 (近詠)

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

六 賞 発 表

令和四年 水明賞

令和四年 季音賞

令和四年 かな女賞

令和四年 新鼓笛賞・山紫賞

令和四年 新珠賞

選考経過

受賞のことは

新珠賞選考経過

石山かつ子
大村節代
大橋勉代
ほか

永野史代

茂木和子

山本鬼之介

藤澤喜久
井口俊晴
山田美佐尾
ほか

19

熊倉千重子
近藤徹平
田中章嘉
ほか

24

46 43 42 40 35 32



新季音同人発表

一一〇〇号記念特集

冠 木 門 主宰作品の鑑賞

硯 箱 季音月評

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

境 延昭

井口俊晴

網野月を

宮崎斗士

水明集

染谷正信
山岸久美子

渋谷さいち
ほか

水明集作品評

水 琴 窟 (水明集二月号鑑賞)

山本鬼之介

山 紫 集

池田雅夫

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

俳誌望見

梅澤佐江

句集喝采

近藤徹平

水明例会報・各地句会報

99

風声・発展基金御礼

全国大会のお知らせ

全国大会兼題句募集
後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

ときめきの川

山本鬼之介

名にしおうお洒落倶楽部の春コート

番台は昭和の華よ春灯

囀に和む雷神風神凶

艦長の袖の金筋風光る

花冷やオート・クチュール試着室

指を抜く手品の種よ万愚節

彼の日のやうに心ときめく春の川

春の雲動かぬままに夜の空

近景

茂木和子

保護犬のまどろみ深し浅き春
柳の芽蔵の白壁影ろひぬ
春灯や鶴を折りゐる手暗がり
何擱む赤子の拳松の花
眠れ眠れ沈丁の香の被さり来
電線に膝繰る鳥の長閑なり
一斉に放つ風船門出の日

今年も終息の見えないコロナ禍の中で年を迎えた。新しいコロナ株も見つかり四度目のワクチン接種も考えられているらしい。
国外ではソ連とウクライナの戦争、北朝鮮の弾道ミサイルが日本海に向けての発射と不穏な動き、もうこれ以上は止めてと大声で叫びたい。
家籠りの中、一日も早い安寧を願いつつも俳句のある日日に感謝し幸せを感じている。
わが家の庭には今デージーの花盛り、秋にはコスモスの花を咲かせたい。

半身

永野史代

脱走兵のごと 霾天にまぎれ込む
電気工事の白き火花よ 雪女郎
雛しまふ 明るき憂ひありしかな
せせらぎに 触れる指先 水温む
半身かなし び半身よろこび 西行忌
春夕 焼の裏に 潜みし 戦かな
春場所や モンゴル力士の 技一本

優しさ

仏国の某大学教授が逝去され、その追悼会に出席（夫の恩師）。主催はノーベル化学賞受賞のレーン教授。様々な講演、イベント等々。その後の夕食会。大きな丸テーブルに一人ぼつんとしていた私……。そつと隣りの席に座られたレーン教授は私に話しかけ、句や俳画の話となった。一句即吟。それを翻訳した長年仏在住の日本の方。翌日、渡仏時にしのはせていた葉書の俳画数枚を教授へ。とても喜ばれた。その後話す機会もなく帰国したが、今でもその優しさは心に残り忘れられない。コロナ、地震で苦しんでいる方々に優しさを！戦は止めよ！子供たちに未来を！

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

二月号

威風堂堂大火へ化学消防車

化学消防車には火災の対象によって幾種類もあるらしい。水と激しく反応する金属ソーダや有毒ガスの工場火災には不可欠である。ジェット燃料を扱う空港でも見かける。消防車の装備に加え、操作する消防士にも高度の知識や技量が求められるに違いない。消防士を含めての賛歌と読む。

借景は天の香具山初写真

香具山は奈良の桜井市と橿原市の境にある一五〇M程の山。万葉集の「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山」で有名。初写真の借景が香具山と言うのが句意だが其れだけの句ではあるまい。和歌の作者は歴史上八人の女帝の一人持統天皇である。令和も四年の正月にあって、作者が女帝持統天皇を意識したのは間違いない。

軍神の妻の遺影や寒卵

ギリシャのアリスやローマのマルスなど軍神は神話のもの。明治の軍神乃木希典は夫妻揃って明治天皇に殉死した。大戦

末期には特攻の先陣を軍神と崇め称揚した過去がある。近世の軍神はおぞまじさが纏いつく。妻の遺影と詠むからは特攻の妻と読む。季語「寒卵」が鍵、蛇笏の「大つぶの寒卵おく檻樓の上」が頭を過る。

後世ともに戦で死んで神になるなど御免蒙りたい。

木造母校今は白聖に冬木立

木造母校とは懐かしい。小、中学校は勿論高校もそして大学も一部木造校舎が残り講堂には銃弾の跡があった。透明と摺りの硝子が混じる窓の棧はコーキングと云うのかセメント状のものが風化し今にも崩れ落ちそうであった。冬木立の中の白聖の校舎、恵まれたキャンパスライフの今を誇ることが出来るか。作者の問いかけの様に読む。

藤田進に似たる師範ぞ寒稽古

藤田進が黒澤明の監督デビュー作品「姿三四郎」の主演であったのを没後に知った。福岡県久留米出身、端正な顔立ちから軍人役として戦意高揚映画の常連であった。最後に観たのは日米合作「トラトラトラ」だった。きびきびとした映画の中の所作同様に、師範の厳しさが読み取れる。

人形に入魂の眼を牙返る

雛人形は頭、胴、小道具に分業の職人から問屋がパーツを仕入れて組み完成させて販売する。中でも頭かぶ作りには練った桐粉の型抜きから、口に紅を指し眼を入れ髪を結う十ほど工程がある。眼こそ命、正に入魂の眼である。

鑑賞に当たり、岩槻人形博物館と人形協同組合に頼った。岩槻には昭和六十二年、問屋だけでも五十七軒あったものが現在は問屋、小売、分業の職人全てを含め組合加入の会員は五十五人とのこと。生活様式の変化にさらされている。季語「牙返る」が深い。元々「牙ゆ」は冷ゆに加え光・音・色などが澄む、深みのある言葉である。

下萌の更地 三角 三業地

サ行の韻を踏みリズムが小気味良い。昔ながらの街並みが再開発でがらりと様相を変え、後に三角の更地が残ったのであろう。嘗ては賑わった三業地であればその無残さは尚更である。三業地ではないが春日部の楸邨旧居が頭を過る。道路の拡幅で全く輪郭を遺さず、旧居跡の標識のみが立つ。下五を除けば我が家の近くにもある光景である。

遁走の野火をとどむる青不動

タイトル「不動明王」はこの句に因る。大日如来の化身と言われ、忿怒の姿で火焰の中にあり右手に剣、左手に策繩を持つ。観音・地藏と並び広く信仰される。青不動は通常赤、黄と並び京都青蓮院など特定の仏画を指すが、詠まれたのは身近にあるお不動の立像と解したい。野火の盛る様、「遁走」の表現に納得する。

南から春一番と旅一座

一南、特に九州には大衆劇団が多く、温かくなるのを待つて北へと巡業したと作者に聞いたことがある。しかし九州の田舎育ちの私には稲の収穫を終えた晩秋の記憶がある。列島を北上しその帰路でもあったのだろう。父の生家の裏にクリークに囲まれ土橋一つが掛かる田があり、臨時の小屋を設える格好の場所であった。南から北へ、そのロマンは何だろう。地図は北が上だけの話ではあるまい。

語ろうてゐるか日永の比翼塚

比翼塚は相思の男女を一緒に葬った塚で古事記の時代から江戸に至るまで各地に残る。目黒の平井権八と小柴、文京区にはお七と吉三郎の塚など有名。相思であった男女が墓の中で睦まじく話しているとの想像。浄瑠璃や芝居に通じた作者、念頭には特定の演目の場面がある筈である。

硯箱

◆季音二月

井口俊晴

青空や松葉に残る垂り雪

網野月を

昨日からの雪がようやく止んでくれた。薄黒く墨を溶いたみたいだった空は嘘のように晴れ上がり、今朝は雲一つない青空が広がっている。ふと玄関脇の松の木を見ると、まだ枝には雪が残っており、その針のようにとがった松を伝って、ポトリぽとりと雫を垂らしている。まるで明治か大正時代の屋敷町を眺めているみたいで、古き良き時代の名残りが息づいている気がするのだ。

コーヒーブレイク鉄瓶に沸く寒の水

大村節代

ちよつと根を詰めて読んだり書いたり、いろいろ仕事をしたので、頭の芯が疲れ、眼も霞んできた。そろそろ夕食の準備も始めなければいけないし、とりあえず、ここはコーヒーブレイクとしましょうか。寒の冷たい水を鉄瓶に汲んで火にかける。私はコーヒーに薬缶のお湯は使わない。ステンレス

と違って、まろやかなお湯が沸く鉄瓶に決めている。せっかくドリップするのに、微妙な味わいがだめになるような気がするからだ。

満天の星の見守る浮寝鳥

十倉和子

厳寒の真夜中、物音一つない暗い湖に、鴨だろうか、それとも鳩だろうか、十数羽の水鳥が身を寄せ合って浮いている。大方は首を羽の中に突っ込み、寒風から身を守るようにして寝ている。赤々と輝くおうし座の一等星アルデバランや、ごちゃごちゃと星屑の塊りのように見えるスバルなど、満天の星々がその様子を見守っている。鳥たちは厳しい冬をこの冷たい湖で過ごすのだ。

お年玉しつかり握り紀伊国屋

茂木和子

子供たちにとって、何が嬉しいかと言えば、お年玉を頂くこと。だが、コロナ禍でお年始のお客さんが減って、収入は

激減だ。その、わずかなお年玉を握りしめて近くの紀伊国屋書店に急ぐ。「鬼滅の刃」とか「呪術廻戦」など、クラスで話題になる本を買う。コミックばかりだと親に叱られるから「ねこねこ日本史」のような為になる本も忘れずに買うようにしている。

枯葉積む中に平たく猫眠る

野口和子

庭の隅にできた枯葉の吹き溜まり。ハナミズキとか、揉むとポロポロと崩れそうな柔らかい葉の堆積は、それこそ自然のベッドのよう。そこに我が家の猫ちゃんがちゃっかり転がって寝ている。家の外であっても、太陽の光を浴びて、こちらが思っている以上にほっこりしているらしい。それはそれ、はうつとりと手足を伸ばし、まるで熊の敷物みたいに平たくなって昼寝を楽しんでいるのだ。

小正月小鍋ふつつ小豆粥

井関礼子

一月十五日の小正月の朝、小豆粥を作ることにした。小鍋に小豆とお米を入れ、ふつつと煮立てる。小豆の優しい甘さと、お粥の塩味が絶妙だ。昔から小豆粥を食べると一年間の邪気を祓い、万病を除くとされてきた。新型コロナウイルスなんかヘッチャラだ。なにせ小豆粥は、紀貫之の土佐日記に登場す

るくらい、古い歴史があるのだから。小正月と小豆粥は季重なりだが小正月、小鍋、小豆、「小」の字が三つ並んで小気味よい。

初春や一升壺も横になり

田中章嘉

お正月くらいは好きなお酒を思う存分楽しみたい。呑兵衛だの、体に悪いだの、いつも口うるさい女房なんぞ、この際は無視。純米大吟醸の一升壺を空けて、とつてもいい気分だ。ガラス戸越しの午後の日を浴びた畳にゴロツと寝転ぶ。すぐ横には、まるで分身みたいに一升壺も転がっていて……。え？ そんな夢みたいなことって、本当にあってもいいのかなあ。ま、お正月だから許されるかな。

飛び降りて転ぶもをりし寒雀

瀬戸雄二郎

屋根の上で雀がチュンチュン鳴いているなと思っていたら、急にわらわらと庭に飛び降りてきた。七、八羽もいたのだろうか。その中に、何を慌てたのか、地面に降りた拍子に転んだ。そそっかしい奴がいた。もし猫でもいたら、ひとたまりもないだろうに。もつとも、そんな愛嬌があるから愛されるのだろう。きょうは寒の真つただ中だが、もうじき春になれば、恋の季節がやって来ることだろう。あのそそっかしい雀はうまくやるだろうか？

季音雪



春 寒 石山 かつ子

薔薇の芽の針やはらかに小糠雨
薔薇の芽や日々にくらむ胸の内
春寒や個個に母あり無言館
雛送る波が一押し二押しす
抱擁の形くづさず流し雛

貝 寄 風 大橋 廸 代

貝寄風の若の浦瞰る風羅坊
貝寄風や神慮にかなふ子安貝
風音は水音なりき空海忌
円墳に坐すは不埒ぞ梅の花
松の花長押しにさびぬ三つ道具

青天井 大村節代

黄心樹の花 栢尾 さく子

小学校は明治創立緑立つ
夕焼や松の緑は男前
世界遺産の松下村塾つばめ来る
紙風船に命吹き込むお母さん
青天井目ざし風船一人旅

春闘の尖りすぎたるピラの文字
銅像の武者の孤独に花黄心樹
蝶華麗松は武将の名を付けて
願望が咽に絡まるようず風
時雨れては晴れては帰雁急かす空

安行坂 小倉倭子

桜東風 菊池 ひろこ

無為の日の至福な夕べ春炬燵
流し雛苦労話はほどほどに
墓参する安行坂の花の中
陽光を掴み取るかに座禅草
読み返すかな女の調べ水温む

春炬燵旧居の鴨居高かりき
啓蟄や裝飾蓋のマンホール
腹案のありてムズムズ木の芽時
朝東風や知恩院なる忘れ傘
令和も四年白虎の西へ桜東風

鼓 動 五 明 昇

揺るぎなき大地の鼓動下萌ゆる
万葉の香にかたかごの花筵
薔薇の芽や外航船の遠汽笛
居酒屋へ桂馬跳びする春の泥
田楽や皿も桧の馬籠宿

一 升 瓶 境 延 昭

ばらの芽や恋のはなしは全て嘘
白酒や酔はすつもりが酔はされて
公達の遠流のごとく流し雛
一升瓶提げて個展へ柳の芽
堰越ゆる水の煌めき茨の芽

白 昼 夢 椎 野 美 代 子

耳もとに巴里の街騒花ミモザ
疑心なき命掲ぐる白木蓮
薔薇芽たつ園を巡りてロゼワイン
雛の灯消せば洩れくる呼気吐息
お白酒とろりとろりと白昼夢

朧 夜 島 津 初 花

四阿に談笑もなく梅白し
朧夜や小皿に鰻の淡き色
乾杯や蓋盛り上がる蛤椀
蛤やコトンと音す厨の灯
春きざす苺タルトのガラス越し

櫻 咲 く 鈴 木 康 世

貝 寄 風 十 倉 和 子

今生くることの幸せ櫻咲く
春風に眉間の力抜けてをり
孕みたる風は黄の色花ミモザ
リラの花大正ロマンの飾り窓
あと書を残し本閉づ春の宵

貝寄風や男黙々魚網干す
貝寄風の四天王寺に亀つどふ
お松明火の粉浴びては声に出て
渡し場に残る棒杓蛸蚪遊ぶ
若駒に丸太割り抜く水呑場

ベレー帽 田 寺 玲 子

行 方 永 野 史 代

亀鳴くや家老屋敷の謎深む
三鬼忌のベレー帽ゆく北野坂
鞭を手に馬上の少女風光る
霾や猫あまたなる漁師町
襟きりりタカラジェンヌの卒業歌

荒東風にゆらぎし恋の行方かな
心地よき夕東風に身を委ねをり
荒東風や願ひ叶ふか絵馬の揺れ
木瓜の花肩の力を抜いてみよ
足枷の名残りか春野のアンクレット

春の月 西山貴美子

猫の背が総毛立ちたる花粉症
恋猫の尾が吸ひ込まれる赤鳥居
春塵や太郎の旋毛鳩の胸
彼岸会のナプキン元にもどらない
脇寺の戸が開いてゐる春の月

春愁 波多野寿子

安曇野の川滔々と鳥帰る
しなやかに過ぎる黒猫黄水仙
春愁や閉ぢし文箱をまた開くる
整然と琴の合奏梅開く
お彼岸の僧の手を借り座りけり

道の駅 星野和葉

遠きビル未だ目覚めぬ春霞
筑波嶺の二体寄り添ふ遠霞
小流れに合はす足どり長閑なり
犬同士飼主同士のどけしや
のどけしや買ふでもなしに道の駅

野面積み 茂木和子

松の芯男結びの菰を解く
石垣は野面積みなり緑立つ
沖波や黙むらさきに松の芯
初緑未来見てゐる子の瞳
松の芯外し忘れし長梯子

雛 送り 矢作水尾

小町娘 柚木治子

薔薇の芽のこぞりて光る雨の糸
金婚の旅の薔薇園芽の勢
逝きし人なほまなうら春コート
千代紙の滲みあはれや流し雛
蔵町や蔵の匂ひの雛送る

待つと云ふときめきのあり初桜
白きもの天降りてけぶる初桜
教会へ長き急坂初桜
堀割や将棋指南の春裕
桜餅小町娘の風情して

春の潮 山中みどり

太平楽 由良ゆら女

デイズニーランドの城に狼煙や春の潮
走り根の多き山道春の鳶
ミモザ咲き厚焼玉子のサンドイッチ
人が逝く噂のかるさ花辛夷
雪柳老舗呉服屋の店仕舞

貝寄風や火焰太鼓に鳩の舞
貝寄風に太平楽な余生かな
桜鳥賊ころりとからすとんびかな
極まるや闇をくらりと猫の恋
亀鳴くや地球俄かに生ぐさし

春景色 吉住光弥

薔薇の芽の夢励ますに内助の数
黒ぐろと樹林見栄切る春雨のなか
風船美し亡妻への手紙託さんか
しだれ桃咲いて今昔恋模様
山茱萸咲く老爺ひとりの公園守

春まけて 網野月を

秘めたくも秘めきれぬもの沈丁花
春分出勤あつちの方へ手を合はす
彼岸西風やくざ映画の二本立て
桜鯛と云はれ何気に食べにけり
夕桜両手で包む燐寸の火

渺渺と 石井喜恵

松の芯海渺渺と竜馬像
薔薇の芽やとげ柔らかにきのふけふ
時々は遠き眼差し畑を打つ
春浅し序でに頼む届け物
草餅や小江戸老舗の包み紙

☆

☆

季音月

花時雨 藤澤喜久

春暁や待人に吹く千の風
瘡蓋の剥れて痒し春の雷
花時雨衣紋繕ひ小走りに
花菜漬板間の軋み竈神
菜の花や走る逃げるよ鬼ごっこ

雛市 山田美佐尾

綾取りの琴の形や春の雨
薔薇芽吹き石像少女天を突く
雛市や東くだりの雛筆筒
春茜「幾久しく」で文を締む
春宵や久しく見えぬ馴染客

長閑なり 井口俊晴

長閑なる御幸の浜の波の音
春泥に心許なきハイヒール
つちふるや苦々しげな妻の顔
朝刊を取つて戻つて春炬燵
いかなご来る水平線の彼方から

春うれひ 梅澤佐江

手を合はせ水の別れや雛送り
浮き沈みあるも人生蜆汁
恋に落ちたるごと抜け出せぬ春炬燵
薔薇の芽の真紅にきほひ立つ命
アランフェス協奏曲や春うれひ

白酒 大場順子

少女立つ春風戦ぐ野の真中
ほのぼのと女系三代お白酒
薔薇の芽のくれなるすでに妃の気品
棒高跳啓蟄の土ぐんと踏み
桜貝ひとつ手にのせくれし人

お白酒 丸山 マスミ

ひとり旅梅東風と行く京の路地
語り部の膝をくづして蓬餅
青空にすくとアンネのバラ芽吹く
お白酒いつしか弾む女帝論
回転ドアまづ風船の飛び出せり

啓蟄の風 高島 寛治

啓蟄の風受け流す風見鶏
掘り起こす啓蟄の土匂ひくる
初桜見上げ稚児の目透き通る
薄紙に包まり眠れ雛納め
猫捜すビラ宙に舞ふ春一番

春の昼 池田 雅夫

春風を手中に収め山の神
野仏の重たき臉春の昼
春草に牛の涎のだらりだらり
鳶の輪の揺るがぬ軌道春の空
写真撮る花盗つ人と名乗りつつ

くぎ煮談義 森本 早苗

貝寄風や島の突端父祖眠る
木の芽風くぎ煮談義に花の咲く
搗きたたての菱餅求め時の町
追つかけの田園ホール斑雪
囀や鎮守の森の獣道

春炬燵 井上 燈女

種浸し万の泡生む小さき音
春耕や嫁と言はれて田に老いて
赤飯のほどよく炊けて春祭
四人とは落ち着く座席春炬燵
二歳児はまねごとばかり囀へづれり

桜 鳥羽 和風

花の雨顔整ふる納棺師
句碑に添ふ桜も愛でし長良川
桜鯛真中を撈る柁目かな
散る桜棚田も上の二三枚
歌姫の歌に奏づる花吹雪

若狭富士 宇白白鷺

店中に香気ただよふ桜餅
桜餅抱きて見返る若狭富士
初黄砂鉄磨かれてゐたりけり
蘿曇り八達嶺の遥かなり
柳の芽師弟別れの全昌寺

土瓶 町野広子

若緑仕分けて洗ふ嬰の物
薬草を煎じる土瓶春一番
海苔桶を積みて磯舟漕ぎ出しぬ
先丸き眉墨削る浅き春
明滅の街灯一つ春浅し

病室にて 松井由紀子

春雷の遠く病室黙ふかく
点滴を引き仰ぐ空鳥帰る
掌に受くる錠剤しろし余寒なほ
春昼や身ごなし軽き研修医
病窓の「武甲」はなやぐ春入日

山笑ふ 森川義子

ひたはしる走者の孤独山笑ふ
薔薇の芽のくれなる映ゆる雨の糸
竹垣の結び目新た薔薇芽吹く
美しき影を惹きゆく流し雛
春雨や久しき烏賊の糸づくり

大地 荒井俱子

かたくりの花に腹這ふカメラマン
日照雨して光の中の猫柳
釣人の増えし川辺や猫柳
つくし野に紙飛行機が不時着す
人住むを大地と言へり春の泥

桜童子 渡辺舍人

老桜芽吹かす桜童子見ゆ
凭れ合ふことの大事やチューリップ
小綬鶏や父母の知らざる恋を曳き
口笛に春告鳥の法花経
ままごとの家は二階屋雛の前

山笑ふ 松宮保人

胸躍る佐保姫来ると云ふ噂
春一番女のお洒落吹き飛ばす
紅梅や牛の像にも二礼して
産土の懐にあり山笑ふ
流水の軋む碧さや青の空

春一番 霜中冬至

物言はぬ山笑ふなり片便り
大福帳つじつま合はず山笑ふ
梅見月わらじひきざる発心寺
ゆつくりともの云ふ人や春一番
茶髪して恥づかしうれし女正月

薔薇の芽 内田恵子

下萌や上がり框にベビー靴
根菜のとろとろスープ余寒かな
薔薇の芽や少女抱ふるトウシューズ
薔薇の芽や赤子の乳歯生えはじめ
ひようひようとお出づる少年お白酒

春一番 川崎道子

橋上の背へ一太刀春一番
冷かしが本気となりし植木市
店番と値段かけひき植木市
陽炎の中へつつこむ消防車
貝寄風やハングルの瓶漂着す

山笑ふ 上戸千津子

託されし「木」の名を忘れ山笑ふ
土筆和に七十五日先の世に
蛤の溺れるほどの酒の高
啓蟄や招かざる客到来す
初蝶の草すれすれに千鳥足

田楽 岡野順子

田楽は野点の友を想ひ出す
刺す串の田楽の香を愛づる人
刺す串の青き串型細濁り
竹伐りの音工事の音を抜けてくる
田楽の味噌の香りに歩を止むる

野焼のサイレン 松本光子

渡良瀬の野焼サイレン始まりぬ
野焼して走る男の無精髭
告白や祈願太鼓の陽炎へり
老船に陽炎朝日いきいきと
名なし山子等の遊びに笑ひだす

初桜 西浦千枝子

パソコンの誤作動多し春の風邪
今盛り夫の遺せし枝垂れ梅
此の坂を登れば生家葱の花
古里や一番見たき初桜
快晴やリフトの視野に紫雲英畑

鉾泉水 野口和子

鉾泉水で作る饅頭木の芽時
春耕やまづ耕運機直さねば
春の雨木々ら大きく深呼吸
春の土掘りては嗅ひで犬の昼
囀りが囀り呼びて空真青

渡し 松山清子

明け放つ待合室の春日濃し
草餅の歪は吾子の手作りとうららかや江戸の渡しの枕みえて
リス猿の動き眼で追ふ風光る
昨日京都明日沖縄と春休み

☆ ☆

季音花

桃の花

熊倉千重子

木の芽吹く苑に呼応の鳥の声
啓蟄やファッション雑誌などを繰り
奥の間に女将の活けし桃の花
コロナ禍の心ほぐるる桜餅
風光る今日のご機嫌風見鶏

椿餅

田中章嘉

又一つ椿を落とす羽音かな
椿餅久しき夢の蘇る
赤城山車窓を過る薄霞
背を押す時の鐘鳴る夕霞
遠柳築地の渡し夢の夢

関ヶ原

近藤徹平

風光る人影絶えし関ヶ原
春星へいざなふピアノコンチェルト
二人連れ木漏れ日戦ぐ春の森
春嵐個性派揃ふテント劇
クレヨンの自画を添ふる児雛流し

春の服

大塚茂子

ひらがなの名札の光る春の服
今年また裾上げほどく春の服
わらべらの散華や村の春祭
忍城を囲みて騒ぐ木の芽風
山祇のアニメの聖地山笑ふ

春炬燵

石田慶子

密談めく男二人の春炬燵
春炬燵未完のパズル置きしまま
苦苦し暴君の顔野蒜摘む
梅一輪添へられて来る回覧板
夕東風やイチゴショートの色くずれ

春雨の酔ひ 河野 はるみ

恋猫の戦ひ破れ声ほそし
孫と猫ふいに顔出す春炬燵
主なき邸の庭に茨の芽
破け傘斜めにかざし春の雨
春の雨我を誘ふ繩のれん

木々芽吹く 井上 玲子

木々の芽のこぞりて四季の一楽章
蒼天へ枝を泳がせ梅真白
柔らかな日差しにふくる牡丹の芽
修善寺の丹の橋けぶる春の雨
甲斐路行く車窓彩る桃の花

放屁 正木 萬蝶

強東風やふくらみきれぬ恋心
春炬燵曲折を経て妻帯す
見合ひより始まりし恋桜東風
田楽や同居人てふ夫のゐて
やりすごす夫の放屁よ春炬燵

春の水 飛永 鼓

春水の追ひかけてくる農作業
図らずも膝がふらつく水の春
逃げ水は会ひたき人の幻か
春水やひつくり返る夢の相
春の水訛りし五体鞭を打つ

春の風 青木 鶴城

春の風ちよつびり色の違ふ義歯
街角のガラスに映す春コート
山葵田の流るる水や陽のきらら
名水の滝に句碑あり山笑ふ
久に引く鎖の重み春の嶺

老いも若きも 日高 道を

老木も若木のごとし木の芽張る
方寸の庭にも息吹木の芽張る
啓蟄の大樹の声を聞きにゆく
ふる里の山膨らませ春一番
春の夜や部活帰りの影二つ

花見膳

野田静香

撮り鉄や胸の高鳴る春休
幸運を祈る別れやリラの雨
新調の春コート掛け時刻表
戻し汁加へまろやか花見膳
安曇野の風の清けし山葵沢

黄水仙

宮崎チアキ

停戦に挑む世界や黄水仙
子の夢は風船に乗り遙かなり
啓蟄や松の菰とる御苑かな
篋に蒼のままの紅椿
近付けば小さき木の芽の息吹かな

三月の雀

下川光子

囀の中に雀のおしやべりも
雀すずめ命あふるる春の庭
菜園に雀飛び交ふ日永かな
空つぼの倉に雀や木の芽雨
薔薇の芽や誰を待つか鉄の椅子

萌黄色

福田千春

梅東風や胸に収まる抱つこの子
からんころ空缶東風に踊らされ
上掛けを茶から萌黄に春炬燵
世の中は換気の連呼東風荒ぶ
梅東風や御籤は凶と書かれしも

風光る

中野彊

今日もまた梅見る窓を楽しめり
満開の小さき梅園庭の隅
満開の梅に青空深呼吸
光ファイバー登る工事夫風光る
フィットネス終へて春めく日に向かふ

学び舎の春

宮崎紫水

登校の声高らかに風光る
春疾風遅刻生徒の背中押し
顔隠す女生徒多し春の雨
陽炎や生徒は半日下校なり
学び舎に温もりほのか朧月

ふらここ 石川理恵

ふらここを譲つてくれし餓鬼大将
ふらここや寂しき時は軋みたる
立ち尽くす群衆のごとつくしんぼ
父と来し道菜の花の続く道
春雷を聞く人生に岐路いくつ

春の山 野平美紗子

琵琶湖の面くつきり映す春の山
父眠る大和の里の春の山
水温み真鯉の動き活発に
温む沼釣人の数日々に増し
苦労人なりし妣へと桃の花

江ノ島の春 瀬戸雄二郎

懈怠なる夫を起せし春の雷
春雷や爆音遠き国に住み
つくづくし少年兵が担ぐ銃
写生子達筆を放りて土筆摘み
江ノ島の春帆船の溢れ出し

初桜 葛城千世子

はないちげ抗ウイルス剤効きし母
ちかちかと縦列駐車受験の日
充電器付け長電話春炬燵
貝寄風や鴨の寝姿笛のやう
初桜そ知らぬ顔の鴨遊ぶ

春の月 後藤綾子

春嵐砂塵巻き上ぐ競馬場
春深し古着一枚捨てかねて
夕東風の中走りゆく消防車
山葵田や三連水車の重き音
山葵田の水の輝き昼の月

☆ ☆

現代俳句鑑賞

網野月を

水涸れてたひらな石に日の当る

今井肖子

〔俳句四季〕3月号・あをあをとより〕

いろいろな石が想定できるのであろう。搔い掘りにむき出しとなった石、川底に敷き詰められて橋脚の波除石を支えている数多の石などである。自然石の場合も無難あるだろうが、中七の「たひらな」から人工的に設えられた様態を想像する。筆者は墓石へ連想が飛んだ。「水涸れて」とは少々趣を異にするかもしれないが、墓石の上に表面張力した水を思い浮かべてしまったからだ。もともと作者は、この「たひらな石」の存在を知っていたのだろうか。突き放して句中には何も語っていない。その無言に詩であることの存在感を覚える。他に「元旦や空あをあをとひきしまる」がある。

たちまちに砂のよせ来る冬構

後藤章

〔俳句四季〕3月号・虹蔵不見より〕

「虹蔵不見（にじかくれてみえず）」は七十二候の一つで小雪の初候である。「虹始見」と呼応するのであろうか。七十二候はわずか五日ほどの期間であって、季節感の移ろいは微妙なものであろう。それだからこそ、よせて来るのは雪

ではなくて「砂」なのである。この句を詠んだ当該の年だけの景ではあろうが、その発見こそ作者の慧眼なのである。他に「鉛筆の描画虹蔵不見」がある。

春昼の猿の抱擁長かりき

久根美和子

〔俳句界〕3月号・鄙ことばより〕

座五の「長かりき」は俳味が横溢している。「長かりき」には時間的な内容だけではなくて、固定した景のように作者には見えた、という感慨も含まれているのである。猿の抱擁は動物園などでよく見る光景であるが、もしかしたら半自然界で目撃したのかも知れないが、作者もまたその「長かりき」時を注視し続けたのである。他に「鳥帰るあばよあばよと鄙ことば」がある。

陽炎を来る人遠ざかるように

森川敬三

〔俳句界〕3月号・赤子の目玉より〕

上五の季語「陽炎」の本質を鋭く見抜いている。対象となる「来る人」は近づけば近づく程、焦点が合わなくなるように「陽炎」えるのである。ほやけて見える「来る人」はその存在感がまるで「遠ざか」っているように思えるのである。たぶん実体験からの創作である。他に「初蝶へ赤子の目玉よ

く動く」がある。

春昼や藻の漂ふは死の匂ひ 長嶺千晶

〔俳壇〕3月号・梓弓より〕

いささか筆者には難しい句であるが、「死」の主体もくは「死」の本質を再考する切っ掛けとなった句である。上五の季語「春昼」という時間設定、「藻」から連想する水辺の空間設定、そしてその時空間とは真逆の「死」への予感が句の中に構成されている。「匂ひ」と言ったところに作者の心象さえもが投影されている。ミレーの描いた「オフィーリア」に通じるものがあるだろう。他に「場違ひな漢と思ふ花粉症」がある。

逆茂木のうちそと自在雪蛭 星野早苗

〔俳壇〕3月号・雪蛭より〕

上五の「逆茂木」の道具立てが巧妙である。「逆茂木」による空間の設定が句意の場の設定を導き出し、決定づけているのである。本来ならば、「うち」を守り、「そと」へ防ぐものなのであるが、「雪蛭」は「自在」だというのが、作者の意図とは異なるだろうが、ウクライナ侵略と重ね合わせてしまふ筆者なのである。「雪蛭」のイメージは人の霊のようなものを暗示しているのかも知れない。心もしくは想いといった方がより近いのではないか。

歩きだす顔に日の差す年の暮 吉田成子

〔俳句〕3月号・冬ごもりより〕

「年の暮」の日差しであるので、ポジティブな解釈が相当であろうと考える。暖かみのある、または明るさのある印象を読者に懐かせる。しかも加えて、上五の「歩きだす」の措辞に能動的な作者の行為が伏線として設定されている。時間と空間の設定以外にある種の条件を前提に構成されているのだ。行動を起こしたからこそ得ることの出来た安堵感があるのである。他に「寒波来る擦傷強き窓ガラス」がある。

解けるしか飛び去りるしか蟬氷 如月のら

〔俳句〕3月号・海の記憶より〕

なかなかお目にかからない季語「蟬氷」である。上五の「解けるしか」はその通りであるが、もう一つの選択肢中七の「飛び去りるしか」が絶妙である。言葉遊びの延長線上なのだが、この氷は本当に飛び去ったもののようにも思われた作者なのである。言葉遊びの域を超えて精神が遊んでいるわけだ。

白いノートひとり言葉の植樹祭 南園美基

〔句誌〕「形象」2月号・形象作品より〕

中七の「ひとり」は「言葉」に係るのか、「植樹祭」に係るのか？そのどちらへも係るのか。筆者は「植樹」へ係るように鑑賞した。句中の一つ一つの言葉とそれらの繋がりが、良く構成されて意味付けられている。作者には、文房具のアイテムを巧みに使った良句が多い。

『水明誌』を繙く（水明三月号）

宮崎斗士（『海原』副編集人・
現代俳句協会顕彰部長）

「受付は終りました」と白マスク 西山貴美子

新型コロナウイルス禍も早や丸二年が経過、三年目に突入した。

まさにマスクとは切っても切れない縁となった令和日本、この「受付」はやはり「病院の」受付と私は解釈した。

医療逼迫の現況に翻弄される……それは患者側も医療施設側も同じこと。マスク着用者同士のそれぞれの立ち位置があらためて明確になるひととき。全国各地で繰り広げられたであろういたく切実、辛い一景ではある。

マスクの「白」を「拒絶」の色としてしっかりと定着、端的でありながら読者に強い印象を残す一句だった。

『水明』3月号、「色」をモチーフとした作品では他にも、
〈波に浮く白の品格百合鷗／石山かつ子〉〈春を待つ銀のフルートに
跳ぬる指／山中みどり〉〈冬晴や女庭師の紅き髪／野口和子〉〈元朝
や金の箔押し夫婦箸／梅澤輝翠〉〈にこり湯に浮かぶ黄色の冬至の
香／橋爪さなえ〉などに共鳴。そして〈全開の孔雀に会ふも春寒し
／山本鬼之介〉。この句もまた、孔雀の全身の鮮やかさと「春寒し」
とのコントラストが織りなす詩情。何とも快く決まった。

寒卵店主猫背の定食屋 石田慶子

「寒卵」という季語、その独特の滋味にかねてから非常に心惹かれていた。卵自体のもともとの絶妙なフォルム、固い殻に閉じ込められたどこか哲学的でさえあるフォルムはまさに一級のモダンアートオブジュのよう。そしてその佇まいは、確かに冬の寒さ、静けさ、乾燥した空気にびたりと添うのだ。

掲句、例えば定食のメニューの一品として生卵が供されたという解釈もできるが、私は「猫背の店主」を含めたこの定食屋全体の在りようを表白するための「寒卵」の斡旋と受け取る。滋養に富むとされる寒卵だけに、店のメニューの一つ一つもおそらく栄養のパランスがきちんと取れた、店主の自信作ばかりなのであろう。いささか無愛想ではあるが、決してインスタ映えはしないが、その地域に頼りにされている実直な定食屋像がありありと浮かぶ。他にも、朝食はクロワッサンと寒卵／大村節代〈わが気魄一気に飲み込む寒卵／小倉倭子〉〈寒卵「苞」の字ワープロ登録す／菊池ひろこ〉〈ほととする喉越しとほる寒卵／岡野順子〉〈良禽の嘴まろし寒卵／正木萬蝶〉など、「寒卵」が十分活かされた作品群。

俳誌望見 梅澤佐江

『京鹿子』 令和四年二月号 通巻一七〇号

主宰 鈴鹿呂仁 発行所 京都府京都市

大正九年二月、鈴鹿野風呂が京都で創刊。師系高浜虚子「創刊以来の有季・定型を守り、自由無礙の精神で広く個性を尊重するところにある」を理念とする。(月刊)
主宰詠「拾掬集 その七十七」^か一〇句より

大年の風の紡ぐは未来の夢
大晦日、強い寒気が流れ込み、次第に風も強まり吹き荒れている。然しこの風は新しい年、明日を呼ぶ未来への夢を織り成す風と捉えている作者、強い意志と共に前向きな生き方が伝わって来る。

聲音に胸の高鳴りポインセチア
待ち焦がれた人の聲音がどんどん近づいて来る。早鐘を打つように胸の鼓動も激しくなる程の幸せな瞬間が直ぐ其処迄、燃えるような真紅の「ポインセチア」の季語が、その後のストーリーの全てを想像させてくれる。

煩惱の思考を閉ざす寒の鯉
無胃魚である鯉は絶え間なく餌を食べ続けているが、冬眠状態に入ると生理機能を停止させ、動かず食わずで宛ら一切の欲望を閉じ込めた修行僧のようである。元来活発な魚だけに、寒中じつと動かぬ鯉に生きとし生ける物への冬の厳しさが感じられる。

冬蜂の日和見峠策尽きる

洞ヶ峠は、京都府八幡市と大阪府枚方市との境界にある峠。古くから戦略上の要地で、一五八二年山崎合戦の際、筒井順慶が戦況の趨勢をみて去就を決した故事から日和見峠の所以であるが、この冬蜂は寒空の下、冬眠越冬もせずに万策尽きたように弱々しく動いている。読み違えたのか、否、雌蜂に生まれ付いたこと自体が誤算である？

寒波くる只管動くやじろべゑ

寒波襲来、寒さを避け外出を控えて家に籠る。手慰みに次郎兵衛を突いてみるが、どんなに強く突いても倒れず動き続けている。弥次郎兵衛のように支点よりも重心は下げられないが、せめて転ばぬよう体幹を鍛えなければ。

神籠集 同人作品 一八名 各五句より

春風邪を語りて女生生し 沼田巴字

たまゆらの菊の香ゆれて客のくる 直江裕子

しるべ石色の褌せゆく式部の実 高木晶子

京鹿子集 主宰選 五五一名 各四句より

6Bで交はす筆談冬兆す 福島照子

後ろ手の障子に残す悔い一つ 中村倚久子

秋風を切るスケボーの着地音 藤井晴子

深紅色ワイングラスの中は秋 樋口裕子

実相論を踏まえた上で遊行論の抒情に至る、結社の百年の歴史が見事に醸成された俳誌「京鹿子」の益々のご発展を祈念致します。

令和四年

水明賞

原田秀子
曲淵徹雄
保坂翔太

令和四年

季音賞

井上玲子
正木萬蝶

山本鬼之介

選考経過

◆水明賞◆

令和四年の水明賞は、令和四年二月二十六日の水明賞選考委員会において受賞者を決定した。選考委員会では、先ず各委員より受賞に対する総論を述べ、次に令和三年水明集の巻頭を取った十一名の作家を候補者として、各月の作品の出来映えや順位、更に、十月号での夏季競詠の順位も審査対象として全委員が十二分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記の三氏に授賞することを決定した。今年七月号より、季音「花」欄の作家として更に研鑽され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層発揮した作品を発表されること期待する。

◆季音賞◆

令和四年の季音賞は、令和四年二月二十六日の季音賞選考委員会において受賞者を決定した。選考委員会では、前年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者とし、その作品について各委員が充分に意見を述べ合い討議を重ねた結果、上記の両氏に授賞することを決定した。今年七月号より、季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけられると共に、後輩の指導にも心配りをしてもらうことを望んでいる。

令和四年

かな女賞

網野月を
石山かつ子

令和四年

新珠賞

森美枝子
元田亮一
後記朝香

山本鬼之介

選考経過

◆かな女賞◆

令和四年のかな女賞について、主宰として、永年に亘る地道な働きに加えた昨年の顕著な功績を評価して、上記両氏に授賞する意向であることを、網野幹事長と大村編集長に伝えて同意を得、その旨を三月十四日の常任運営幹事会において報告した。

◆新珠賞◆

令和四年の新珠賞は、令和四年三月二十五日の新珠賞選考委員会において、推選委員五名の推選結果も加味して選考し決定した。選考経過は左記の通り。

- ①予選通過作品20編の作者名を隠し作品Noで選考した。
- ②各委員が、10編を推選作品に挙げ、1位を10点として以下順位の降下に沿って得点を減じ、10位を1点として点数を付けて発表した。
- ③作品ごとに総合点を算出し、得点が無かった3作品を除いた17作品について、各委員が講評を述べた。
- ④種々協議の結果、17作品の中で得点数が圧倒的に優位であった3作品を最終選考作品とした。
- ⑤④の結果により、上記の三氏に授賞することを決定した。

令和四年

鼓 笛 賞

染
谷
正
信

令和四年

山 紫 賞

鳥
羽
和
風
準
渋谷きいち

瀬戸雄二郎

大村節代

網野月を

◆鼓笛賞◆

本年から鼓笛賞が新設されました。選考会では、水明賞に受賞決定の三氏を除外し、素晴らしい句を発表された二、三の方を呈示しました。主宰と幹事長と三者で協議の結果、染谷正信氏の作品に共感が集まり決定となりました。尚、鼓笛賞受賞者は次年度以降も受賞が可能です。

◆山紫賞◆

令和四年の山紫賞は、令和四年二月二十六日の選考会において、山本鬼之介主宰、大村節代編集長のご同意を経て決定した。受賞者は、特選四回に選抜され、また安定的に高位にありました。令和四年は、山紫賞の初回ということで全九か月分の成績で決定されました。当該正賞受賞者は、山紫集への投句、また特選への選出は以後同様ですが、本年以降の山紫賞受賞選考対象者とはなりません。

水明賞 原田秀子



〈略歴〉昭和十年埼玉県生。
平成二十七年六月水明入会。
平成二十九年同人。
水明熊谷句会、野ばらの会、現
代俳句協会会員。

受賞のことば

雛飾りを終え一家団欒のひとつ日、二月二十六日の夜、鬼之介主宰から「水明賞おめでとう」のお電話を頂き、感激と喜びで何とお返事したか覚えておりません。傍らの家族の拍手で我に返る思いでした。

平成二十六年の同窓会の帰途、徹平さんからのお誘いを受けて六月に入会いたしました。

俳句歴も浅く、鑑賞力、語彙の乏しさを痛感しておりますが、優しさを失うことなく作り続けたいと思っております。

水明一〇〇号記念の年に受賞できますこと、誠に幸甚なことと存じます。

山本鬼之介主宰、選考委員の先生方、諸先生方、温かく支えてくださった句友の皆様、本当にありがとうございます。これからもご指導よろしくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

身に入むやカザルスの弾く鳥の歌
彩と香を愛でし一鉢菊膾
懼もなく船漕ぐ夫の日向ほこ
冬座敷手斧目のこる黒き梁
炭の尉そつとそのまま春隣
蛤の幽かな吐息夜の静寂
春泥をつけし尼僧の白緒下駄
口遊ぶラビアンローズさくらんぼ
山独活のもてなしに酔ふ峡の宿
まつ新たなベッドシートや夏さざす

水明賞

曲淵徹雄



〔略歴〕昭和十八年富山県生。平成十六年四月水明入会。二十九年同人。第三例会、りんどう俳句会、新樹の会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度の水明賞受賞にあたり、山本鬼之介主宰はじめ、これまでに御指導いただいた先生、先輩、句友の皆様から御礼申し上げます。

思いがけない受賞の知らせを主宰からいただいた二月二十六日の宵は、つい晩酌の銚子を一本増やしました。

ここ二年余りのコロナ禍の状況下にも、所属句会がほとんど欠かさず開かれ、皆様と句座を楽しめたことはなにより励みになりました。また、図らずも水明常任運営幹事に席を置いたこと、新たな句会に入会したことなどが、若いとは言えない身に活を入れることになったようです。

これからも俳句と、同じ頃に始めた太極拳とを、心身の健康のための両輪として楽しんで行きたいと願っています。今後とも皆様の御指導をよろしく御願ひ申し上げます。

▼受賞対象句抄

カラカラと笑ふ卒塔婆秋高し
初時雨瀬に棹さす下り舟
カーテンを駆くる鳥影冬うらら
沼に射す入り日の水脈を浮寝鳥
陽炎に憑かれ遠のく赤い靴
花筏人情嘶を生みし橋
遠ざかる一片の雲楠若葉
軽暖や解体すすむ町工場
羅の膝を占めたる下がり猫
一叢の雨後の昂り昼の虫

水明賞 保坂翔太



〈略歴〉昭和二十年新潟県生。
平成二十五年水明入会。平成
二十九年新珠賞。平成二十九年
同人。第四例会、俳句の手ほど
き、りんどう俳句会、円卓の会、
現代俳句協会会員。

受賞のことば

二月二十六日夜、鬼之介主宰より「水明賞に決まりました。おめでとう。今後も精進して下さい。」とのお電話をいただきました。「ありがとうございます」という言葉のみを繰り返していました。うれしさと同時に身の引き締まる思いが致しました。

平成二十五年四月、水明に入会し、故星野光二主宰、現在主宰として水明を率いておられます山本鬼之介先生、故山中順子先生、諸先生、句会の皆様よりご指導いただきましたことを深く感謝申し上げます。

自分の力量を顧みず、作風をいかに確立しようかなどと考えた時期もあり、試行錯誤の連続でした。しかし「自分の句を振り返った時、これが自分の作風なのだと思えるようになればいいのだ」と考えるようになりました。

この受賞を糧として、さらに精進したいと思いますので、今後とも皆様のご指導を宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

料峭や青果市場の糶滾る
海峡の大橋越えて初蝶来
古民家の湯気噴く羽釜若葉風
ダイビングの翡翠を撮る豆博士
花白粉留守番の子が鏡台に
本尊の陰でとよもすちちる虫
お手玉を教ふる 軀木守柿
冬近し尖がり来る浪切るみよし
火吹竹湯加減聞きし頃の風呂
神名備の筑波嶺 仄か冬満月

季音賞

井上玲子



〔略歴〕昭和七年埼玉県生。
平成二十六年水明入会。
二十九年同人。
平成三十年水明賞。
第四例会、第五例会、芽吹句会。

受賞のことば

今回栄えある「季音賞」を戴けることになりました賞の重みに身の引きしまる思いであります。

主宰から暖かいお声で、「季音賞」受賞のお電話をいただきました。夢を見ている心地で「有り難うございます」の他何を申し上げたか覚えていませんが嬉しさで一杯でした。日本語の豊かさ。四季を廻る自然の豊かさ。俳句の道へ入れたことを本当に嬉しく思います。余生を健康で生き生き暮らしてゆけるのも俳句の道を歩いているからだと思えます。

これも主宰の暖かなご指導の賜物だと有り難く思います。又諸先輩、句友の優れたお句に接し勉強させていただきましたに思っています。今後とも宜しくお願いいたします。

▼受賞対象句抄

胸中にひびく海鳴り冬銀河
若冲の鶏鳴を聞く初枕
噴煙は太古の息吹冬晴る
木の芽張る樹海の息吹満身に
白藤の垂れて菩薩のかんばせを
詩を追ひ逃げ水を追ひ八十路かな
寂寞と喪の家つつむ梅雨の月
秋めくや池塘に影を千切れ雲
八千草を活けて野の風生まれけり
長き夜や鳥羽僧正と一つ灯に

季音賞 正木萬蝶



〔略歴〕昭和二十四年神奈川県生。平成十四年水明入会。十八年同人。令和二年水明賞。第三例会、若松例会、鶴川山百合例会、ミモザの会。

受賞のことば

久々のしもやけを撫でながら髪染めをしていた二月末の夜、主宰よりの受賞のお言葉に驚きでしどろもどろに御礼を申し上げました。この数年、世の中は自粛生活が続き句会も儘ならず悶々と不完全燃焼の日々が多かったので感激も一入でした。

その様な中でも色々な句会に新しい方々の参加があり活気づいて刺激になりました。新しい感性と正しい日本語の表現を目指して皆様と切磋琢磨しながら励んで行きたいと思えます。

永く続ける事が出来たのも原点である横浜の句友の方々のご支援と主宰のご指導あってこそと思っております。

会場が開いている限りは句会はやる！の主宰の強いご意思と行動力を見習い、座の文学としての俳句を楽しみたいと思います。

主宰はじめ選考委員、句友の方々に心よりの感謝を申し上げます。

▼受賞対象句抄

霜夜斯くも麗し草笛光子かな
山ひとつ枯れて木霊の吹きだまり
亡国の音おんの空耳みみ霾かきぐもり
東 京 都 檜 原 村 の 夕 蛙
聞き怨えんの浅き眠りやほたる降る
此れやこのブエノスアイレス盆の月
追 分 や 右 に 左 に 乱 れ 萩
扁 額 の 巧 拙 如 何 に 三 九 日
うそ寒しファーストキスはあなたです
湯豆腐やゆれて崩れて余生なほ

かな女賞

網野月を

時代にその芸術を、芸術にその自由を

〔略歴〕昭和三十五年与野市生。昭和五十八年水明入会、平成九年水明同人、平成二十一年季音賞受賞。第二例会、若松例会、鶴川山百合、円卓軒料の会、繭の会、若鮎の会、めだかの会所属。また Haquology 代表、鳥羽谷同人、他に面、新俳句空間、Canopus、岩ひばり、つう、Bura、小田急七人会、学習院俳句会に参加。学習院大学さくらアカデミー俳句教室講師、Tchetais 俳句教室講師。現代俳句協会会員、同副幹事長兼顕彰部長を経て現在同監査役。



師は、山本紫黄先生である。鬼之介主宰の長兄に当たられる。師との出会いは平成九年、京都での水明全国大会であった。その際のエピソードは、不細工の極みのようなものであった。別の機会に書くことにしたい。

ところで師の旗印は「よれよれでかつこいい」である。今回のかな女賞受賞で、私も旗印を考えている。

四十六年間、俳句に携わってきた。そして今も追慕し続けるテーマ、季語のこと、句のリズムについて、などなど確着したことが無くて、日々アップデートしているのが現状なのである。

俳句を詠む者には、目標がある。勿論、良句を詠むことだが、もう一つに季語を考案するということであろうと思う。私は己を斬って「春眠忌」を考創してみた。いまだ定着していない。ほかの新季語には、受け売りだが「仮面ライダー」も良いかな?と思っている。(笑)

さて旗印であるが、今のところ「よれよれでもかつこいい」くらいにしておこうかと考えている。

末筆になりましたが、主宰はじめ水明俳句会の皆様のお陰です。ありがとうございます。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

かな女賞

石山 かつ子

〔略歴〕昭和十三年埼玉県生。昭和五十四年水明入会。平成八年新珠賞。平成十年水明賞。平成十二年季音賞。雛の会。歩の会。柿の木塾。珊瑚の会。俳句の手ほどき。現代俳句協会会員。



受賞に思う

桜の苔もちらほらとほころび始めた今日この頃、鬼之介主宰より「かな女賞に決まった」とお電話をいただきました。思ってもいない事でしたのでどうしてよいやら分からず迷っていると「もう決まったのです」とおっしゃられ、心を定めて頂くことにしました。

思い返せば、俳句とは一番遠い存在であった私が友達に誘われ、日本人ならば言葉そのものが五音七音で俳句になるからそれでいいのよと簡単な気持で入会させていただけました。その頃は、毎月吟行で午前中は近くの川辺で芹を摘んだり、接骨木の花を見つけたりその幹に生える木耳を採ったり、今頃は田んぼが薺の花で一面になるのです。そして午後は句会。いつの間にか俳句の虜になっていました。

遅々とした歩みながらこれからも自分の俳句というものを精進してまいりたいと思います。

主宰・編集長、諸先輩・句友の皆様、これからも御指導の程よろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

鼓笛賞

染谷正信



〔略歴〕昭和二十二年埼玉県生。平成二十七年水明入会、三十年同人。りんどう俳句会、新樹の会、コクーンシテイカルチャー俳句教室。現代俳句協会会員。

▼受賞対象句

城址に万朶の桜朝まだき
看護師の白衣が眩しメーデー歌
コックスは美声で美男競漕会

受賞のことば

この度、新たに新設されました鼓笛賞の初代受賞者という栄誉を頂き、大変光栄に思います。これもひとえに、主宰・編集長をはじめ水明の皆様のご指導の賜物と感謝致しております。今後とも宜しくお願い致します。

山紫賞

鳥羽和風



〔略歴〕昭和十五年福井県生。平成十八年水明入会。平成二十二年同人。平成二十五年季音同人。水明賞。平成三十年季音賞。若狭水明、鳥羽谷俳句会、やよい会、山水会、乙花会、沖の石俳句会。

▼受賞対象句

好きな子へパチンと輪ゴム春を待つ
花木筆句碑を読める子読めない子
入れ墨の人と懇意に花は葉に
雨蛙旅に出る日の雨女

受賞のことば

この度、第一回目の記念すべき、山紫賞を賜り、驚きと共に心より感謝申し上げます。俳句を始めて二十五年、何の取得も無い自分を、此所まで引つ張って下さった、先生の先方や鬼之介主宰又今回のチャンスを頂いた、月を先生や先輩諸氏多くの句友の皆さんに心より、お礼申し上げますと共に、これからも御指導賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

新珠賞 森 美枝子



〔略歴〕昭和二十二年埼玉県生。
令和三年水明入会。コクーンシ
ティカルチャー俳句教室。

受賞のことば

この度は新珠賞受賞にあたり、山本鬼之介主宰、境延昭講師、選考委員の皆様にご心より御礼を申し上げます。

俳句は友人に誘われ、「面白そう」と歳時記等を購入、コクーンシティカルチャー俳句教室へ通い始めました。初めのうちは面白く、四字熟語やことわざ等を並べていましたが、これでは俳句にならない事に気づきました。そのうちに言葉が浮かんで来なくなり辞めたくなった事が何度かありました。

会の先輩に相談すると「言葉を楽しみなさい」との励ましに思い留まり、今回の受賞に至る事が出来ました。

歳時記の持つ美しさ、季語の奥深さにこれからも触れつけていきたいと思っております。

講師、句友の皆様これからもどうぞ宜しくお願い致します。

▼受賞対象句

寒 牡 丹

露味噲や捲り癖つく料理本
家業継ぐ心に決めし葱坊主
幼な子の青き瞳や蛇苺
小指反る母似のしぐさ更衣
張り替へて浅間の風の網戸越
裏返る海月に意志のありにけり
夕闇の沼の主鳴く夏の果
夫あらばけふ金婚の初しぐれ
鯛や白寿の母は鶴を折る
コスモス野リフト静かにすれちがふ
桴さばく古老の腰や秋祭
嫁がせて目深にかぶる冬帽子
寒牡丹古刹に遺る葵紋
こげ癖の鍋をなだめつ年用意
侍べらせて酌み交はしたき雪女

新珠賞 元田亮一



〔略歴〕昭和三十七年福岡県生。
令和三年水明入会。若鮎句会。
現代俳句協会会員。

受賞のことば

新珠賞受賞のお電話を主宰よりいただき、暫らくの時間が経ちました。先ずは驚き、次にじわじわと喜びがこみ上げ、今は伝統ある結社の新人賞に選ばれたことに懐いていきます。

若鮎句会には昨年三月に入会しました。以来、網野月を先生のご指導の下、青木鶴城さんや句友達と楽しく学んでいます。投句が多くの方に選ばれるのは嬉しいものです。更に水明抄や水琴窟で新たな角度で鑑賞していただくことは、喜びであり学びでもあります。

応募句は、秋の一日、秋ヶ瀬の自然に身を置き、湧き上がってきた想いをまとめたものです。拙さが目立ちますが、私にとっては何れも愛おしい句です。俳句道があるならば、漸く入口を潜ったところでしょう。受賞を励みに、作句力、鑑賞力を蓄えることが最大の恩返しと理解し、精進を続けてまいります。

あらためまして、主宰、月を先生、選考委員の皆様、句友の皆様にご感謝申し上げます。ありがとうございました。

▼受賞対象句

秋ヶ瀬

秋ヶ瀬のふり向く君に秋は来ぬ
せせらぎの音秋色に染まりけり
秋蟬の最期の聲と思ひけり
残り蚊にふうと息する君なりき
秋桜摘むふくらはぎ見つめをり
その硬さそのままにせよ青蜜柑
秋澄むや出逢ひの頃の空の青
きつと母纏はりつくは秋の蝶
秋の雲空一面の割烹着
黄落の喝采天を満たしをり
秋高し姿は見えぬジェット音
一陣の風振り向けば星流る
秋雨の句ひはじめの小径かな
目隠れば瞬きの音星月夜
秋惜しむ最終列車の汽笛かな

新珠賞

後記朝香



〔略歴〕昭和十八年東京都生。
令和二年水明入会。蝌蚪の会。

受賞のことば

この度は新珠賞受賞有難うございます。主宰よりお電話を頂きました際は本当に驚き、私なんかでよろしいのでしょうかと申し上げてしまいました。主宰、選考委員の諸先生方に心より御礼申し上げます。

私は今高齢者施設に入居しております。入居半年目でコロナ禍が始まり、外出も散歩以外は制限され、何か室内でできる趣味をと考え俳句を始めました。初めは俳句入門書等で勉強していましたが、しばらくしてどこか俳句会に入って勉強したいと思うようになり、水明句会に入会させて頂きました。コロナ禍のため句会には出席できず、欠席投句させて頂いております。月を先生には丁寧な添削を頂き、又、句友の皆様の句を勉強させて頂いております。この間、鶴城先生には大変お世話になり、感謝申し上げます。

今後共、気を引き締め作句に励んで参りますので、月を先生、諸先輩方、句友の皆様ご指導の程よろしくお願致します。

▼受賞対象句

街角ピアノ

採りたての紫紺の深き秋茄子
夕ひぐらし父母の遺せし句集かな
夕日中鶏頭の朱の燃え立ちぬ
小鳥来る今日はピアノの発表会
飛行士の地球に帰還冬董
立ちがたきエンドロールや冬帽子
廃線のレールに遊ぶ寒雀
尼寺の木魚のひびき初氷
初めての杵の重さや餅を搗く
黒々と鳥よぎりゆく初茜
淑氣満つあはき美濃紙に筆おろす
軒つらら滴る音や菜作り
街角のピアノ聴き入る春隣
早咲の紅梅空をひとり占め
赤き実のいよよきらめく春の雪

新珠賞という階段

選考委員長 山本鬼之介

水明創刊百年に向けてスタートした去年に引き続き、今年も二十編の予選通過作品について選考する運びとなったことは喜ばしいことです。更に、昨年と同様に俳句歴の浅い新人の方々が多く応募して下さったことも嬉しいことでした。一昨年から新人の多い句会を中心に、新珠賞への応募を積極的に呼びかけてきたことが効を奏したと思われまますので、今後もこうした地道な努力を、句会の指導者・幹事・先輩諸氏に続けていただくことをお願いいたします。

さて、今年の選考結果は既報の通りですが、誤字・脱字・送り仮名・旧仮名遣いなど、基本的な誤りが今もって解消されていません。選考委員長として、今後応募する方々には是非心掛けてほしいことをお伝えします。

- ①文字は一字一字心を込めて丁寧を書く。●癖字に注意。
- ②誤字・脱字を皆無にする。●辞書で充分確認。
- ③送り仮名や旧仮名遣いを正しく表記する。●辞書で確認。
- ④作品と同様に題名が大事。●作品十五句の雰囲気に対応しい題名を熟考すること。
- ⑤所属句会の幹事や先輩に、誤字・脱字・送り仮名・旧仮名

遣いなどについて最終チェックしてもらうのも良策。

森美枝子「寒牡丹」

作者の身辺に即した句材を無難にまとめたと思われる十五句で、好感が持てるが題名が安易なのが残念であった。題名に工夫があれば、作品の十五句がもっと引き立ったと思う。それはさておき、特筆の五句を記し受賞の祝意を申し上げる。

小指反る母似のしぐさ更衣

裏返る海月に意志のありにけり

夫あらばけふ金婚の初しぐれ

桴さばく古老の腰や秋祭

侍らせて酌み交はしたき雪女

など、焦点の決まった作品に今後の成長を予感する。

元田亮一「秋ヶ瀬」

一選考委員の立場で言えば、二十編の中の一位に推した作品である。その理由は、「秋ヶ瀬」(さいたま市の西の端を流れる荒川の河川敷のことで、秋ヶ瀬公園として整備されている)と言う題名に基づいた十五句によって悲恋の物語が構成されているからである。即ち、初句が初秋の心ときめく出会いであり、最終句が晩秋の切ない別離なのである。そして、その間の経緯をあいだの十三句が語っている。本作品の題名は初句の頭から取ったものではなく、十五句を演出する重要な「鍵」なのである。このように卓越した作品に出会えたの

は久しいことで、十分に愉しませてもらったし、大変嬉しかった。何時の日にか、この続編が詠まれることを期待する。

後記朝香「街角ピアノ」

初秋から初春に至る季節を背景に詠まれた十五句である。気負いが無く淡淡と書かれた十五句の中に、心地よいリズムとお洒落な雰囲気を感じた。題名がもたらす効果音の働きかも知れない。

採りたての紫紺の深き秋茄子

夕日中鶏頭の朱の燃え立ちぬ

立ちがたきエンドロールや冬帽子

尼寺の木魚のひびき初氷

黒々と鳥よぎりゆく初茜

街角のピアノ聴き入る春隣

赤き実のいよよきらめく春の雪

平易な句材を多角的に捉えた立体感のある俳句で、今後にはさらなる飛躍が期待できる。

◆次に、受賞者以外の作品に触れ、来年の応募を待ちたい。

橡餅は三日三晩の水垢離す

冬晴や涅槃のごとき遠き山

冬枯れて樹影いよいよ濃くなりぬ

怪獣の鳴き声響く稲田かな

霊園のみぢの光泉下へも

新井孝磨

〃

〃

反町 修

〃

凍蝶の終の座禪か石の上
どことなく夫の面差し男雛
名を呼べど符返さぬ夏の山
豆絞り一家総出の秋祭

熟るるとは澄んでゆくことゆすらうめ
鈴虫の声を夜更けの友とする
臘梅を活けし貴人の現かな
ものの芽を眼下に登る甍

引き際の清々しさよ秋の雷
くらやみに月のしたたる聖夜かな
初夢は桜の下のしやれかうべ
柔らかき猫の背骨や初日さす

鼻筋のねり白粉や秋祭
寒紅やさらに華やぐ日本髪
新そばを啜る父母百寿まで
年の瀬や今宵第九に酔ふつもり

霜の朝介護バスより手を振られ
春浅し花屋の花の競ひ合ひ
恋といふ病のカルテ西鶴忌
冬日和湯気も味はふ煮ぼうとう

初蛩森にしみ入る沢の音
兄弟集ひ尽きぬ話や雪しんしん
のどけしや能書多きレストラン
山茶花よ前座となりて咲き誇れ

噴水へコインを抛る秋日和

篠崎紀子

〃

〃

吉川拓真

〃

〃

奥山粉雪

〃

佐藤克之

〃

佐々木史女

〃

古池恵里子

反町 修

嶋田洋子

〃

小林京子

〃

〃

山崎真由美

〃

秋谷風舎

〃

川島夕峰

〃

綿貫ひさの

〃

小田美智

〃

選評

網野月を

今年の応募作品は二十作品が揃った。題においては工夫のあとが見受けられたように思うが、十五句の中には、埋合せ的な句などが含まれている作品もあったように思う。

推選委員と選考委員の第一回目の投票によって「寒牡丹」「秋ヶ瀬」「街角ピアノ」「鎌倉散歩」「地元小景」「リラの花」「ものの芽」の七作品が選考の対象となった。

その中で受賞作の三作品は、作り込まれた句、構成力の際立った句、叙情の横溢した句などが配置されて、掲題にもマッチした作品となっていた。受賞作品の中から秀逸と筆者が考える句とコメントしたい句を掲げて鑑賞します。

張り替へて浅間の風の網戸越

森美 枝子

露味噲や捲り癖つく料理本

こげ癖の鍋をなだめつ年用意

良く見て作句しているというのが、第一印象である。日常の中からの素材の拾い上げは、かな女句の仕様を彷彿とさせるものがある。言葉と言葉の関係性の感覚に優れたものを覚えます。

秋澄むや出逢ひの頃の空の青

元田 亮一

その硬さそのままにせよ青蜜柑

目瞑れば瞬きの音星月夜

叙景句と叙情句を創作の中で近づけようとする試みを感じることが出来る。この作家には、表現したい強烈な世界があ

るように思う。文学青年がいつの間にか文学成年になったということか。

尼寺の木魚のひびき初水

後記朝香

小鳥来る今日はピアノの発表会

街角のピアノ聴き入る春隣

題「街角ピアノ」の括りが十五句を括りつけて饒舌になり過ぎず、また舌足らずになっていない。句意と斡旋した季語との関係性もつかず離れずであるばかりでなく、立体的な構成が図られていて、句の深みを引き出しているように思う。

草市の軽き荷物をかき抱く

奥山粉雪

鼻筋のねり白粉や秋祭

粧へる山を馳走のにぎり飯

自称「変な」句を作る作家なのである。新語を作るし、視座も特異である。しかしながら本人は、特段に穿った思いのあつてのことではないのである。「変な」は本人のナチュラルな個性なのであろう。

海の家大腿骨の支えかな

吉川 拓真

母の日の肩甲骨の硬さかな

凍港はみぶに隠れた骨のやう

「骨」の掲題と、骨に終始した十五句はチャレンジそのものである。今後の期待大である。特に挙げた三句の中でも「母の日」は秀句であろう。肩たたき出来る、親孝行できる今の幸せを満喫して欲しい。

おめでとう

大村節代

名前を伏せた新珠賞の応募作品のコピーを、三月十四日に配布された。応募作品のそれぞれの十五句の行間に、応募者の思いやら、真剣な気持が伝わり、思わず襟を正して読ませて頂いた。そして選考会に臨んだ。

さて、今年の応募作品の全体の印象は、昨年の選考会で問題となった誤字と季重なりが大幅に減って、頗る好評であった。今年は題名が如何なものかと、喧喧譁譁と議論になった。しかし最後には、推選委員の方々の選評も加味して、次の三作品に全員一致で決定した。おめでとう。

○森美枝子「寒牡丹」

露味噲や捲り癖つく料理本

夫あらばけふ金婚の初しぐれ

コスモス野リフト静かにすれちがふ

寒牡丹古刹に遣る葵紋

こげ癖の鍋をなだめつ年用意

十五句の情景や心の内がやさしく伝わり共感した。「小指反る」「裏返る」「張り替へて」「嫁がせて」「待べらせて」等を問題にする選者もいた。なるほどこれ等を考えて、更に高みを目指して頂きたいと期待している。

○元田亮一「秋ヶ瀬」

秋ヶ瀬のふり向く君に秋は来ぬ

せせらぎの音秋色に染まりけり

秋澄むや出逢ひの頃の空の青

秋雨の匂ひはじめの小径かな

目瞑れば瞬きの音星月夜

賞が決定してお名前が発表されて驚いた。元田氏は存じ上げないが、掲句の五句はもとより、ナイーブな句の数々に、失礼ながら女性かなと…。

○後記朝香「街角ピアノ」

小鳥来る今日はピアノの発表会

尼寺の木魚のひびき初水

初めの杵の重さや餅を搗く

軒つらら滴る音や菜作り

街角のピアノ聴き入る春隣

応募作品の中から音が聞こえる。響く。十五句の中から、音の聞こえる五句を抜き出した。作者はきつと音楽が好きで音にきわめて敏感な方なのでしょう。

○今回は受賞を逸したが来年も挑戦して頂きたいと思う方。

恋といふ病のカルテ西鶴忌

リセットができれば九月生まれ月

蠟梅の下向くほどに美しく

恩師より米寿祝に全色紙

季語の無い句が数多。掲句も情景は伝わるが季語がない。しかし米寿で新珠賞挑戦に感動した。

杉浦理恵

川島夕峰

佐々木史女

珠を磨く

石山かつ子

今年の新珠賞作品二十篇が揃った。まだオミクロン禍の為に外出もままならぬ今日この頃ではあるが、皆様の個性のある作品が出揃った。今年作品はそれぞれ誤字・脱字も少なく丁寧に書かれてあった。ただ惜しいのは題名の付け方が少し安易になってしまい内容とそぐわないものもあった。

その中で、森美枝子・元田亮一・後記朝香の三氏に受賞となった。お祝申し上げる。

「寒牡丹」 森美枝子

露味噲や捲り癖つく料理本

小指反る母似のしぐさ更衣

夫あらばけふ金婚の初しぐれ

鯛や白寿の母は鶴を折る

料理本を見ながら作るものと言へば、カタカナのモダンな料理かと思へば、日本の伝統的な露味噲という。そのアンパランスな俳諧味。だんだんと歳をとつてくると母似となつてくる仕草。白寿のお母さんに対するやさしさが人の胸にひしひしと伝わってくる。

「秋ヶ瀬」 元田亮一

秋ヶ瀬のふり向く君に秋は来ぬ

せせらぎの音秋色に染まりけり

その硬さそのままにせよ青蜜柑
秋惜しむ最終列車の汽笛かな

身近な街の秋の始めから終りまでを十五句の中に纏めあげている。ときどきは思わせぶりの君が出て来てロマンもありその裏に何か隠れているような気がする。

「街角ピアノ」 後記朝香

採りたての紫紺の深き秋茄子

夕日中鶏頭の朱の燃え立ちぬ

街角のピアノ聴き入る春隣

今のコロナの時期に適った題名の付け方がとても良い。夏の茄子はもう終り秋茄子となり改めて紫紺の瑞々しさを楽しんでる。全体をうまくまとめて新人らしい素直さが順次句を読ませてくれる。

今回受賞を逃したがこれから期待したい作品

杏子煮る夜に杏子の落つる音

小林京子

郭公や庭の文庫の小暗がり

朝顔の紺白紅のそよぎかな

杏を煮る匂ひと庭の杏の熟して落つる音。実際の体験からの句。それから朝顔の匂は物をよく見つけている様子がうかがえる。

影踏みの子に驚きぬ黄水仙

山崎真由美

阿蘇山を下りて九月の草千里

景がよく見える句。句の並べ方が気になった。ぜひ来年も挑戦していただきたい。

新しき星

石井喜恵

世情酷しき昨今、時に詩心を忘れそうな日々が続く。そんな中、今年も新珠賞に二十作品の応募を得た事は何とも喜ばしい。十五句を通じ光る一句、全体の句のバランス、その様な事を考慮して選をさせて頂いた。受賞された森美枝子、元田亮一、後記朝香の三氏には心からのエールをお送りする。

森美枝子「寒牡丹」

露味噲や捲り癖つく料理本

張り替へて浅間の風の網戸越

コスモス野リフト静かにすれちがふ

寒牡丹古刹に遣る葵紋

こげ癖の鍋をなだめつ年用意

選者全員の共感を得た作品である。奇を銜うことなく素直に詠んだ事に好印象を持った。そして一句、一句の独立性のある句柄を評価したい。特に網戸越しに浅間の風とは、大きく詠んで清々しい気分にかけて貰った。

元田亮一「秋ヶ瀬」

秋ヶ瀬のふり向く君に秋は来ぬ

秋蟬の最期の聲と思ひけり

その硬さそのままにせよ青蜜柑

秋雨の匂ひはじめの小径かな

秋惜しむ最終列車の汽笛かな

秋を詠んだ十五句、情感豊かな作品に仕上がった。夏と違い秋になって聞いた蟬の声を、作者は今際の声と云う。その切なさが胸に迫る。青蜜柑の句は作者自身の心象であろう。最後の句まで読んで、これは「君」との出会いから別れまでの事なのでは、とふと思った。

後記朝香「街角ピアノ」

夕日中鶏頭の朱の燃え立ちぬ

廃線のレールに遊ぶ寒雀

尼寺の木魚のひびき初氷

軒つらら滴る音や菜作り

街角のピアノ聴き入る春隣

駅や街角で行摺りの人がピアノを弾くという。今時の情景をタイトルに持って来た事で新鮮なインパクトがあった。木魚の響きから初氷にまで及んだ感覚に繊細さを感じた。又、ピアノを聴いている様子が「春隣」の季語の斡旋が、明るく霧囲気を出し心地良かった。

その他、心に残った味わいある作品を挙げさせて頂く。

篠崎紀子

紅梅の上枝にとどく肩ぐるま

子どもや孫が幼い頃確かに見た懐しい情景に心が和んだ。

綿貫ひさの

生涯に優も可も無しおでん鍋

まさに言い得て妙。大方の人が同感するに違いない。

勁草を知る

井口俊晴

新珠賞を受賞された森美枝子、元田亮一、後記朝香の三氏にお祝いを申し上げます。コロナ禍で活動停止中の結社が少なからずあるなか、水明俳句会は句会を絶やさず、登竜門である新珠賞にも多数の応募がありました。疾風に勁草を知るという言葉がありますが、コロナにくじけない皆さんはその勁草です。審査の対象になった二十作品には、そうした心意気が感じられました。また、作品それぞれが去年より整っており、誤字・脱字の目立つ原稿がほとんど無かったことも、今年の収穫です。

まず、森美枝子さんの「寒牡丹」から。

露味噲や捲り癖つく料理本

夫あらばけふ金婚の初しぐれ

こげ癖の鍋をなだめつ年用意

奇を衒うことなく、落ち着いた句が並び、しっかり家庭を守る主婦の日常が詠まれている。難を言えば、作品の題名を「寒牡丹」とした理由がすぐには分からなかったこと。ようやく十三句目に「寒牡丹古刹に遺る葵紋」と、上野の東照宮を詠んだ句がでてきて納得した。

次は元田亮一さんの「秋ヶ瀬」。さいたま市の西端を流れる荒川の河川敷に広がる公園が舞台。

秋ヶ瀬のふり向く君に秋は来ぬ

秋桜摘むふくらはぎ見つめをり

秋惜しむ最終列車の汽笛かな

古風ではあるが、清潔でロマンチックな句が並び、好感度は抜群。「秋は来ぬ」で始まり「秋惜しむ」で終わる。しかし、秋ヶ瀬を誰もが知っている「全国区」かと言われると、やや苦しいかもしれない。

次は後記朝香さんの「街角ピアノ」。題名がとてもお洒落で惹かれるものがある。

小鳥来る今日はピアノの発表会

廃線のレールに遊ぶ寒雀

街角のピアノ聴き入る春隣

ただ、せっかく軽やかで魅力的な句が並んでいても、題名に沿ってピアノを詠んだ句は二句だけで、それが残念。ここでも題名選びに課題を残したと思う。

今回は入選を逃したものの、魅力的な作品には事欠かない。新井孝磨さんの「鎌倉散歩」は題名そのもの、作者は鎌倉を満喫している。「梵鐘を巡る若葉に栗鼠の影」。鎌倉には栗鼠が多い。私が食事したレストランの庭にも栗鼠が来て遊んでいた。そして「紫陽花や北鎌倉は女道」は鎌倉ファンならで。小田美智さんの「花尽くし」もこれからの精進が楽しみ。「白梅や気高き姿一重よし」、私もそう思う。「a波出てくれるかなヒヤシンス」も面白い。

天馬空くうを行く 保坂翔太

水明の「登竜門」である新珠賞に二十名の方々々が挑戦され、森美枝子、元田亮一、後記朝香の三氏が見事に受賞された。まずは賞を射止められた方々に心よりお祝い申し上げたい。作品を読んで感じたことは、前年と比較し誤字が少なかったこと、文字が丁寧に書かれていたことは可としたい。しかし、題名の付け方に工夫を要する作品、題名と作品の関連性が希薄な作品があり、気になった。

◇寒牡丹 森美枝子

小指反る母似のしぐさ更衣
夫あらばけふ金婚の初しぐれ
蛸や白寿の母は鶴を折る
寒牡丹古刹に遺る葵紋

しつかりした句作りに好感が持てた。十五句それぞれ上手に詠んでいるのであるが、題名を「寒牡丹」とした理由は何であるうか。寒牡丹の句が一番気に入っているということなのだろうか。土台は確かである。今後、大いに期待する。

◇秋ヶ瀬 元田亮一

秋ヶ瀬のふり向く君に秋は来ぬ
その硬さそのままにせよ青蜜柑
秋澄むや出逢ひの頃の空の青
秋雨の匂ひはじめの小径かな

題名「秋ヶ瀬」の作品は、十五句を通しての底流を感じ取ることができ、情感があつた。だが、「その硬さ」の句は

「秋ヶ瀬」での句なのだろうかとの疑問もあつた。そのような句がいくつかあつたが、細君との思い出を「秋ヶ瀬」という場所において感じたのではないかと鑑賞した。一段の飛躍を期待する。

◇街角ピアノ 後記朝香

小鳥来る今日はピアノの発表会
魔線のレールに遊ぶ寒雀
尼寺の木魚のひびき初氷
街角のピアノ聴き入る春隣

テレビで「空港ピアノ」「駅ピアノ」「街角ピアノ」の放送がなされている。題名「街角ピアノ」もそれに因んだものであるう。「小鳥来る」、「街角の」の句によつて十五句全体に明るいう困気を醸し出している。残念なのは句の順番である。春夏秋冬の順に並び替えると良い。そうすることにより、季節の移り変わりをも読者に伝えることができる。今後に期待する。

高得点を得たが、受賞を逃した作家の句を取り上げる。

ドラえもんの魔法のやうな茅の輪かな 反町 修

身を祓い清める「茅の輪」、ドラえもんの「どこでもドア」を引き合いに出したところに諧謔味を感じる。

もう一人の作家の句も取り上げたい。

爽やかやサンタマリアの鐘高し 木村るみ子

景色は見える。情趣が加わればさらに良い。

辞書によれば「天馬空を行く」とは、「天馬が思いのままに空を駆けめぐるように、考え方が自由奔放であるさまのたとえ」とある。着想は千差万別、深み広がり感覚も各々の個性がでる。個性に磨きを掛けて邁進して欲しい。

光る珠

青木鶴城

先ずは今年度の新殊賞をみごと受賞された森美枝子、元田亮一、後記朝香の三氏にお祝いを申し上げたい。

今年の応募二十作品は夫々工夫と創意の上に練り上げられたもので、全体的なレベルの高さを感じ水明の宝として今後に期待を抱かせるに十分であった。ただ、題名は安易に句の中から言葉を取り出すのではなく、是非十五句全体を包括する意味や語句を見つけて欲しいとの思いが残った。

〔寒牡丹〕 森美枝子

露味噲や捲り癖つく料理本

夫あらばけふ金婚の初しくれ

鯛や白寿の母は鶴を折る

こげ癖の鍋をなだめつ年用意

作者の身辺が素直な句で上手に纏められた作品。料理本に捲り癖が付く程料理好きな作者、金婚を迎える前に他界されたご主人、白寿を迎えられたお母様との穏やかな日々。暮には焦げ癖の鍋をなだめつつお節を作っている作者が、たまには雪女でも侍らせて酔ってみたい…屈託のなさが良い。

〔秋ヶ瀬〕 元田亮一

秋ヶ瀬の振りむく君に秋は来ぬ

その硬さそのままにせよ青蜜柑

秋の雲空一面の割烹着

秋惜しむ最終列車の汽笛かな

秋ヶ瀬を舞台にした恋人との景か。振り向く君に秋：謎めく一句から、そのままの硬さでいて欲しいと願いつつ秋の蝶に母を重ね、空一面の雲に母の割烹着を想う作者は、母のような恋人を望んだのか。最終列車の汽笛は何を示唆する。

〔街角ピアノ〕 後記朝香

採りたての紫紺の深き秋茄子

立ちがたきエンドロールや冬帽子

初めての杵の重さや餅を搗く

街角のピアノ聴き入る春隣

作品を通して感じるのは、作者の色と音に関する細やかな感性。採りたての茄子の紫紺に感動し、ドラマのエンドロールに寒さを忘れ、初めて杵の重さを体験した白い餅、そして街角のピアノに耳を傾ける。心の豊かさを感じる作品。

他の作品で印象に残ったのが、「四季」（古池恵里子）と「リラの花」（嶋田洋子）。「四季」は新年と春夏秋冬が上手に詠まれていて下五への導きが秀逸であった。また、「リラの花」は、亡くなられたご主人への想いが根底に流れ、一句一句に感動を覚えたが、テーマへの凭れ感が少し残念だったか。

茜雲春を引き連れ流さるる

月天心支へる虚空肩を組む

語るよな歌声のこしリラの花

名を呼べど返さぬ夏の山

来年も是非更なる高みを目指しての挑戦を期待します。

急がず、休まず。 日高道を

令和四年度の新珠賞の選考が終わりました。

今年も二十名の応募があり、作品からは皆さんの意欲がひしひしと伝わってきました。

受賞された森美枝子、元田亮一、後記朝香のお三方には心よりお祝い申し上げます。

水明の他の結社賞と違い、新珠賞は応募作品の絶対評価で受賞が決定されますが、そのためにはまず応募しなくては始まりません。今回残念ながら選に漏れた方々も、また挑戦を躊躇っている方も、是非来年を目指して頂きたいと思います。

「寒牡丹」 森美枝子

身近な句材の中に作者ご自身をそつと忍ばせて詠まれた十五句、作者とお目にかかったことが無くてもそのお人柄を感じることが出来ます。

「小指反る母似のしぐさ更衣」「夫あらばけふ金婚の初しぐれ」はそのような作者のお心が詰まっています。

他にも「張り替へて浅間の風の網戸越」「コスモス野リフト静かにすれちがふ」「寒牡丹古刹に遺る葵紋」

きつと寒牡丹がお好きなのですね。

「秋ヶ瀬」 元田亮一

十五句を通じて作者の思いがストレートに伝わってくる作品です。特に前半の「出会ひの頃」の各句は瑞々しく、読者をはっとさせます。

「秋ヶ瀬の振りむく君に秋は来ぬ」「せせらぎの音秋色に染まりけり」「その硬さそのままにせよ青蜜柑」「秋澄むや出会ひの頃の空の青」などです。

一方後半では作者の切ない思いを感じる句が並びました。「秋雨の匂ひはじめの小径かな」

「街角ピアノ」 後記朝香

まず素敵な題名に魅了されました。

作品は、日常の作者の身の回りで起こる様々な事柄を上手に捉えておられます。きつと良い俳句眼をお持ちなのでしょう。

「飛行士の地球に帰還冬童」「廃線のレールに遊ぶ寒雀」「尼寺の木魚のひびき初氷」「街角のピアノ聴き入る春隣」
いずれも季語の斡旋がお上手だと思います。

その他印象に残った句から

「笹鳴らし六月の熊出でにけり」

秋谷風舎

「年の瀬や今宵第九に酔ふつもり」

佐藤克之

「母の日の肩甲骨の硬さかな」

吉川拓真

是非来年も継続して挑戦していただきたいと思います。俳句は「急がず、休まず」で、楽しくやりましょう。

新珠賞秀句選

網野月を

空つ風庁舎の国旗絞られて
このこと貨物列車や春近し

綿貫ひさの

座五は「くくられて」「しぼられて」何方であろうか。「空つ風」の業ならば「しぼられて」の読みの方であろう。「このこ」は擬人法的な句いにする叙法である。「貨物列車」にも係るし、「春近し」にも係っているようである。句景へのアプローチが特異な作家なのである。どちらも季語の働きが顕著で、大きいのである。

先生は甘きもの好き目白来る
金柑や屋敷の庭の荒れ果つる

小林京子

両句とも季語の存在感があるのだが、前句は取り合わせ的な構成であり、後句は空間の中に「金柑」と「屋敷の庭」が共存している構成である。景の切り取り方にくつもの方法を持つているようである。作句の際の基本形のヴァリエーションが多い作家のようである。

ふるさとの青を思ひて初鯉
a 波出てくれるかなヒヤシンス

小田美智

句を詠む際の素材の探し方が、念に入っている。素材に対しての愛情を感じるのである。
句材を探すが、単に作句への材片を探すことになって

いない。素材への眼差しが優しいのであろう。いつまでもこの姿勢を忘れないでいて貰いたいものである。

蠟梅の下向くほどに美しく

川島夕峰

上五の季語のあとに切れ字「……や」を持つてくる衝動に駆られたのではなかったらうか。切れ字の誘惑は相当なものであるが、踏みとどまった。切れ字「……や」にした場合普通の句になってしまうのである。「蠟梅」というものは、という一般論になってしまうのである。「……の」にすること、作者が見たその「蠟梅」に固定することが出来た。

寒椿落ちてやぐらに晒す首

新井孝磨

座五の「晒す首」が何ともシュールなのだが、上五の季語「落椿」であるなら至極もつともなことなのである。シュールなだけに「落椿」の、多分真紅なのであろうけれども、色鮮やかさを誘引している。十五句の中の配置に工夫の要る句であらう。

怪獣の鳴き声響く稲田かな

反町 修

「怪獣」とは何と大胆な措辞であらうか。「怪獣」が何を表現しているのか? 「地元小景」の題からも前後の句からも判然としなのだが、季語「稲田」を座五に置いているのであるから、自然界なら何かの鳥、例えば鴉か、譬喩なら農事のコンバインかなにか、と想像するところである。

阿蘇山を下りて九月草千里

山崎真由美

中七の「……九月」という時間の設定が句の深みを作り出している。季語の働きを作者の気づきのなかに封じ込めて、

多くを語らせないようになっているのだ。そして、座五に「草千里」の空間の設定を試みているのも巧みな語順の設定である。固有名詞が二つ揃っているのは、気になるところではある。

秋の雷傘の売り子の走り出て

木村るみ子

題から察するとコロッセウムの周辺か何かの広いスペースが展開しているところではなかったろうか。「売り子の走り出て」がイタリアならではの風情を彷彿とさせている。上五の季語「秋の雷」の斡旋も秀逸である。イタリア南部の若者たちなのかも知れない。

五月雨や矢叫び飲みし衣川

秋谷風舎

座五の「衣川」と中七の「矢叫び」であるから、テーマは衣川の戦なのであろうが、上五の「五月雨」が何とも本歌取りのような設えになっていて配慮が行き届いている。固有名詞はこの一句で他の十四句は、東北の景を纏めたものになっている。

秋茜列を乱して宙返り

嶋田洋子

上五の季語「秋茜」は、赤卒のことであろう。トンボは直線的に飛翔するというイメージを体現しているのだが、作者は「宙返り」の際の群翔する編隊のわずかな乱れを見逃がさなかった。創作ではこういう句は出来ないのである。基本的に忠実に良く見ることに徹している証左であろう。

ものの芽のほぐれほぐれて蔓延びる

佐々木史女

「芽」による物語の延長線上に「蔓」が待ち受けている。

同じ植物の部位であるので、びっくりした展開ではないのだが、それでもこの展開には句意の伸び伸びとした広がりを感じる事が出来る。「ほぐれほぐれ」のリフレインも成功を導き出している。

山眠る連なる雲を従へて

古池恵里子

景を取り込んで、上五の季語「山眠る」に還元している。「山笑ふ」「山滴る」「山粧ふ」と共に山に起因する擬人の季語である。よく見て詠んでいるだけなのかも知れないが、だとすれば観方に独特の個性が反映されているのである。

かくれんぼお尻まるつと夏座敷

杉浦理恵

この作者は日常の語彙、いわゆるスラッグを巧みに句中に取り込むことのチャレンジをし続けている。是非ともそのチャレンジを完遂して貰いたい。感性を如何に武器にするかのタクティクスが欲しい。

因襲へ青いリングが背を向ける

篠崎紀子

上五の「因襲」の真意は分からない。作者のみが知り得ているのである。情報に隠したところがあるのだが、それでも「青いリング」に譬えられた作者自身の、もしくは作者の見つめている主人公の属性が、「因襲」との関係の中に特殊な緊張感を作り出している。

焚火の輪少し崩れて鬼ごっこ

佐藤克之

情感の籠った句である。作者は遠目に子供たちを見つめているのか、それとも自分の子供の頃のメモリーなのか。句中の語彙と句意のバランスが丁度良いのである。

推薦委員寸評より

○宇田白鷺

秋ヶ瀬

全句を読んではさすがしく、さっぱりとした気持になりました。秋という季節があふれていると思いました。

街角ピアノ

日々の生活の中から生まれ出た一句一句に作者の人となりが感じられます。

○大橋迪代

寒 牡 丹

一本芯の通った詠みぶりで骨太の句

○張り替へて浅間の風の網戸越

○コスモス野リフト静かにすれちがふ

○寒牡丹古刹に遺る葵紋

秋ヶ瀬

ロマン漂うやさしい句柄。シヨパンの曲が聴きたくなる。

○秋澄むや出逢ひの頃の空の青

○秋雨の匂ひはじめの小径かな

○目瞑れば瞬きの音星月夜

○椎野美代子

秋ヶ瀬

題名と季語の働きを生かす措辞の、想像力、思い、情感の表現に優れている。ナイーブな自画像描出。

街角ピアノ

普遍性のある詠みに、抒情味もあり、纏っている。題名と作品との通底を思わせる、感じさせる。流れがあれば更によい。

○波多野寿子

寒 牡 丹

情景の描写がうまい。

○鯛や白寿の母は鶴を折る

○椀さばく古老の腰や秋祭

○茂木和子

寒 牡 丹

まず字がしっかりしていて綺麗なので読みやすかった。句の内容の表現に多少違和感のあるものもあったが全体的に上手にまとめ上げていると思う。季語の斡旋もお上手だと思う。

新 珠 賞 (結果報告)

○受賞作品

寒 牡 丹 森 美 枝 子
 秋 ケ 瀬 元 田 亮 一
 街角ピアノ 後 記 朝 香

○予選(通過作品)

(到着順)

桑 の 実 佐 々 木 史 女
 四 季 古 池 恵 里 子
 鎌倉散歩 新 井 孝 磨
 骨 吉 川 拓 真
 地元小景 反 町 修
 リセツト 杉 浦 理 恵
 影踏みの子 山 崎 真 由 美
 櫛 奥 山 粉 雪
 リラの花 嶋 田 洋 子
 笹 鳴 り 秋 谷 風 舎
 春を待つ 川 島 夕 峰
 パズルを解く 綿 貫 ひ さ の

新 季 音 同 人 (昇欄者)

○新季音「月」欄

庭の眺め 小林京子
 花尽くし 小田美智
 ものの芽 篠崎紀子
 秋のイタリア 木村るみ子
 嫁が君 佐藤克之

井上玲子 正木萬蝶
 福田千春

○新季音「花」欄

原田秀子 曲 渕 徹 雄
 保坂翔太
 笹本啓子 橋本京子
 檜鼻ことは 松島寛久

祝

『水明』

1100号

水明俳句会の歴史

「水明」は、本号（令和四年五月号）が「一一〇〇号」です。
この偉業を祝して「水」「明」の読み込み二句を、会員が
作句して、祝う事と致しました。

近代俳句の元を築いた高浜虚子の高弟で、女性俳句の振興に尽力し、大正から昭和初期にかけての女流俳人の草分けであった長谷川かな女によって、昭和五年（1930年）九月、浦和の地で水明が創刊されました。当時、全国から実に多くの方が水明に入り、その後俳壇において水明の名を盤石にしました。昭和二十年を境とした戦前戦後の混乱期においては、水明も多大な影響を受けましたが、かな女主宰はじめ会員諸氏の弛まぬ努力と熱意によって苦難の時代を乗り越えました。初代主宰・長谷川かな女は、約四十年間浦和に居住し、多くの句集や随筆の刊行を通じて、旧浦和市民や埼玉県民の教養と文化活動の普及を推進した功績によって旧浦和市の名誉市民に推され、埼玉県文化功労賞を受賞、さらに紫綬褒章を受章しました。かな女は昭和四四年（1960年）九月二二日に八二歳で永眠、勲四等宝冠章を受章し、旧浦和市葬が営まれました。

長谷川かな女の句碑が、さいたま市浦和区岸町の調（つき）

神社と南区別所の別所沼公園にありますので是非ご覧になってください。

かな女亡き後、かな女の子息の妻・長谷川秋子が二代目主宰を継ぎ、その美貌と才知を称賛されましたが、昭和四八年（1973年）二月、四六歳の若さで急逝しました。

長谷川秋子主宰の元で当時編集長をつとめていた星野紗一が、三代目の主宰に就任し、以後平成十七年（2005年）十二月まで、三二年間の長きにわたり水明俳句会の重責を担いました。

平成十八年（2006年）一月、四代目主宰を実弟の星野光二が受け継ぎ、以後十年の間に、水明創刊八十周年・創刊一千号記念と、創立者である長谷川かな女の偉業をまとめた「長谷川かな女全集」の刊行・創刊八五周年など、節目の記念行事を采配してきましたが、平成三十年（2018年）十月二十九日に逝去しました。

五代目の主宰を山本鬼之介が引き継ぎ現在に至っています。令和二年（2020年）九月に水明俳句会は創刊九十周年を迎えました。

一一〇〇号記念 私の二句

夏立つや水玉跳ぬるワンピース
明眸の思はせぶりよサンデラス

山本鬼之介

曲水の盃ゆるり花の宴
松明の炎のゆらぎ八重桜

青木鶴城

不二山の明水なほも滴れり
起こされて東風明六つや犬の供

秋谷風舎

翡翠や一閃はしる水の黙
雪舟の明鏡止水小春かな

新 曆文

水切りの音もさやかに紅椿
夜明けかな庭に鶯啼くを待つ

阿部幸代

花はさき花はうつろふ水明り
清らかは水の明りに英るなし

網野月を

朝寝せり水を置きたる枕元
春光や明暗の匠フェルメール

新井孝磨

柳の芽水尾をひろげて渡し舟
冬木立有明の月宿らせて

荒井俱子

水琴の音に寄り添ひ紅葉散る
明星の輝くごとき「水明」よ

飯田忠男

水澄めば田螺の舞の見えにけり
透明なコップに一枝紅椿

池田珪子

小流れの水照りをさそふ桃の花
明明と獅子頭めく牡丹の芽

井上玲子

水勢なる光の粒子大瀑布
黎明の空の胎動夏来る

池田雅夫

夏来たる水平線の彼方から
家元は明治の女藍浴衣

井口俊晴

水底の透ける早瀬や薔薇芽吹く
句集読む窓辺明るき初桜

石井喜恵

幹抱へ水音を聴く浅き春
下萌や明るき未来へ続く道

内田恵子

早朝の手水舎にゐて飛花落花
明り取りの窓は三角春うらら

石川理恵

水たまりエイツと飛びて虹に乗る
明け方の天使の梯子秋の海

梅澤輝翠

紫陽花をかきわけ水道検針員
髪の色明るく染めて四月かな

石田慶子

身ほとりの水声澄みし蛍の夜
ささめくやうに白侘助の仄明り

梅澤佐江

水樋の幹に水音山笑ふ
うららかに明け六つの鐘響きけり

石山かつ子

大様なる水夫の船出や風光る
増産の続く工場明の春

遠藤人美

湧水のひとしほ甘し峡青葉
明暗を分かつ世情や春寒し

井関礼子

風の盆ふたり誘ふ水の音
風の盆胡弓の調べ明と闇

大塚茂子

芹摘みや水を濁して鉄洗ふ
蝙蝠とぶ暮色からまる利根明り

井上燈女

水天一碧ゴトビキ岩にいつ小春
声明にふくる金堂初燕

大橋迪代

かな女句碑に春月われに水の音
子と吹けば明日へつきつき石鹼玉

水滴がやがて大河に夏近し
何時迄もかな女光明^{くわんめい}緑立つ

初場所の水入りしばし固唾のむ
連翹に目を奪はれる明るさよ

久の里粉雪流る水銀燈
風向きの明日変はりし新入社員

春めくや障子に揺れる水の照り
モルダウの水面や明し草青む

水流の銀河につづく過去未来
龍膽のかな女の調べ鮮明に

故郷の水田美し皐月かな
馬鈴薯の花の大地や夕明り

春ですね水の流れも野の花も
春暁や明星きらり気が弾む

大場順子

柄杓からのどへ一氣に夏至の水
杏咲き明るく日差し藁屋の絵

大村節代

春光や水占の吉浮かぶ
春の宵明日の礼服用るしけり

岡田宣子

水ぬるみ流るる川の速きかな
明日葉や手折りてもたをりてもなほ

緒方みぎ子

翡翠に吾に水源はるかなり
明朝体の駄句ゆるされよ年賀状

奥山粉雪

飛び石の流るる水の音涼し
明けゆけるビル建つ街の春惜しむ

小倉倭子

水琴窟も祝ひ奏づよ濃りんだう
桜満ち肌明々とかな女句碑

加藤でん治

谷渡り水面を渡る初音かな
桜鯛求めて明石鞆の浦

上戸千津子

御柱清める水も熱くなり
御柱よいさよいさの声明し

栢尾さく子

川崎道子

川島夕峰

菊池ひろこ

木村るみ子

熊倉千重子

河野はるみ

小駒さち子

水鏡に我の一日を春闌ける
きのふより今日に明日に花ひらく

越田栄子

春田打小鮒が跳ぬる用水路
弁明のしどろもどろや春の雷

境 延昭

いのちみず
生命水掌にのる盆栽花つけり
蒲公英の明るさ纏ひ綿毛飛ぶ

小島喜代子

春の水汲めば甘露の口あたり
水明りしてナイーブな杜若

佐々木史女

花一片千代に広がる水の紋
星飛んで千夜一夜の夜明けかな

小林京子

小流れに水草なびき水温む
弥生尽ほがらほがらと明烏

笹本啓子

水攻めを指揮せし古墳法師蟬
「百穴」に異界の明り苔茂る

近藤徹平

春疾風暴れ天竜水しぶき
母の日や明るい笑顔娘につなぎ

佐藤克之

化粧水肌にしみ込む良夜かな
朝焼けや薄墨の空明けてゆく

後記朝香

紗かかりの水面ろろんと鳴りて初夏
大根煮て明世は今も眠り姫

椎野美代子

春の月写す水面に魚跳ねる
風光る明けゆく空に富士聳え

後藤綾子

炎天下水切り競ふはしやぎ声
行くほどに匂ひ開けて花明かり

篠崎紀子

雲水の笠の 一列著莪の花
郭公に寺の一木峽明くる

五明 昇

永き日の水車ひねもす粉をひく
明け初めし山の祠の雪の果

渋谷ぎいち

溪谷の湧水のどを汗のシャツ
亀鳴くや「明日があるさ」をハミングし

斎藤みよ

水ゆらし二匹の金魚尾を広げ
散る桜明と暗との別れ道

嶋田洋子

美しき箏の調べの雪解水
春寒の鶺鴒の瀬に松明焦がす刻

島津初花

はなことば水にとけゆく水中花
蜉蝣のはねよりうすき夜の明け

関根千恵

水煙の楽降る古都の靡なり
薬師寺の塔の明らむげんげん野

下川光子

水脈一すぢ遣し明るし花の川
若葉萌え川辺明るしスケッチ行

関谷多美子

水巡り地球を巡り春の川
空明けて節分草の蕊青し

菅原真理

水浅き方へ方へと蝌蚪の群
メタセコイア芽吹けば明し別所沼

瀬戸雄二郎

春水はやがて大河に大海に
喪が明けぬ梅に託さむ淡き恋

杉浦理恵

春宵の切り火盛り塩水稼業
春袷寄席の目当ては「明烏」

染谷正信

方丈の裏山の水咲く海棠
白木蓮や真白く天に明明に

鈴木和子

蟻地獄斜面を歩む水の星
愛犬と夜明けの散歩合歡の花

反町 修

川べりのベンチに長居水温む
明年は吉報運べ春の風

鈴木藻好

春の風邪漏水箇所が見付からず
菊坂に残る明治の風薫る

高島寛治

水琴窟の音のまろやか春の昼
清明の明けの明星吾を呼ぶ

鈴木康世

大小の水面おほふ蓮青葉
枝垂桜トンネル抜けし明るさよ

高橋満耶子

根開きの水満満と美林かな
花片も光明と舞ふ中尊寺

諏訪サヨ子

水使ふことも楽しや五月来る
女学生の明るき声や水温む

高原和子

凍ゆるむ岩間に落つる水のあと
雛飾る明るい陽ざし背にうけて

田口文子

お手水の鉢いつぱいの春の花
明暗を分けし一球春の空

仲田利子

水溜り子の遊ぶ場や雪解道
障子越明りに淨し如来像

武田重子

春の水見てゐてこころ流さるる
春野に佇む明るさの真只中

永野史代

社家町の四方の水音かきつばた
春暁の天之瓊きぎ矛きぎよ瀬戸明くる

田寺玲子

花粉情報見てより決めるドライブは
下校の子鼻のあたりに春の雪

西浦千枝子

水口を祭る跡取り逞しき
うなぎ屋の明かり障子のうす汚れ

田中章嘉

ごぼごぼと光る湧き水山笑ふ
明日発つ旅の鞆に春の服

西幅公子

水明の慶事に映ゆる胡蝶蘭
襲名披露に適ふ明るさ胡蝶蘭

十倉和子

水盤の水足してゐる生御魂
春の夢明治の母の庇髪

西山貴美子

風光る水琴窟の余韻染む
黎明や水輪一つの残り鴨

外村紀子

故郷の濁りなき川水温む
明々と古木白梅満開に

野口和子

露味噌や酒は長寿の水菓
大漁に明暗分ける鰯起し

鳥羽和風

湧水のせせらぎ春のコンチェルト
ものの芽に瑞光のあり夜明けかな

野田静香

水音か胸の鼓動か朧月
明眸の遺影の笑みや別れ霜

飛永 鼓

秋の山映す琵琶湖の水面かな
手を引かれ明神様へ初詣で

野平美紗子

山笑ふ水飛沫あげ舟下り
山眠る旅の宿から明けの星

野村美子

草叢に水の声あり春浅し
虫の闇あげ見沼の川明かり

古池恵里子

春の虹憩ふ水辺やかな女の碑
百年を指す明りよ若緑

橋本京子

植樹祭漁師の長が水源に
初桜明日へ踏み出す一人つ子

保坂翔太

水茎の跡うるはしき賀状かな
明け放つ窓より初音今朝の幸

原田秀子

水割りやシャンソンに酔ふ春の宵
手話の子の明るい瞳樟若葉

星野和葉

清らかな流るる水の春の川
お花見やワントーン明るく化粧する

樋口元美

まひまひや水の光を練るごとく
合流の音の明るさ春の風

曲淵徹雄

水切りの波紋明かるき春の川
明日登る大岩壁の余寒かな

日高道を

水菓子少し萎みて雛納
昭和の日かつて「平凡」と「明星」

正木萬蝶

打水や石堀小路の薄明り
朝顔や一人住まひを明かるうす

檜鼻ことは

補水ケアまめに促す花の昼
春宵や御開きのあと飲み明かす

町野広子

魚泳ぐ水面きらきら薄水
朝明けの箒目正し淑気満つ

福田千春

爽やかや水ある青き星に住み
菜種梅雨明るきままに降り止まず

松井由紀子

青葡萄水一粒の重さかな
初桜一輪占める明けの空

藤澤喜久

のどけしや川面きらきら水脈光る
徹夜あけの明けの明星東風うけて

松山清子

張り終へし棚田の水に映す顔
明星に願ひを掛くる春の宵

丸屋詠子

雲水立つ花見戻りの広小路
しやぼん玉七色に生れ透明に

本橋稀香

春一番水夫楫取の声高し
籠松明古都の夜焦がす御水取

丸山マシミ

咲き誇り花の下枝の水鏡
高階の朧に浮かぶ窓明り

森美枝子

温もりのかすかに手水初詣
遠足は明日眠れぬ一夜かな

宮崎紫水

沢水のあちこち光る木の芽風
百咲きて百の明るさチューリップ

森川義子

絶え間なき水の煌めき春の川
千二百号めざし明るき新樹かな

宮崎チアキ

忍野八海澄みきる水の鱒の群
明治に建てた物置確か雛納め

森下美智枝

溜池の水面を揺らし小鳥来る
夜明け告ぐ早や梵鐘と時鳥

向井章子

鳶の輪や水平線は春の靄
一尺二寸明石昼網桜樹

森本早苗

夜半の春道頓堀の水明り
光明を纏ふ菩薩やうらけし

村杉清吉

流れ来て脳天突き抜く山清水
三寒の四温は明かし花芽かな

柳父はる

猫柳はやる流れの水色に
連翹や夕べ明るき銀座裏

茂木和子

本流のはげしき水や柳の芽
白木蓮の花明りなる生家かな

矢作水尾

思ひ出は淡雪にじむ水彩画
黎明の襷をつなぐ初御空

元田亮一

雪解の甲武信岳から水の旅
薫風や弧描く水の明るさよ

山川 順

水きよき川床の石春うたふ
明星や春暁の空ひとりじめ

山岸久美子

立春の光あふれて水時計
五代目の筆に明眸福達磨

由良ゆら女

峠越ゆ空の水筒滴りへ
明け易し未だ目覚めぬテント村

山岸弘子

春霞汽水を上るポンポン船
白梅や雨の明るき男坂

横山君夫

一〇一匹水面に映る鯉のぼり
一夜明けにはかに木の芽膨らめり

山口富子

風光る薄く浮き立つ水たまり
いち早く明日の汽車乗る春の夢

吉川拓真

行く雲をけちらしてゐる水馬
カーテンのゆるきさざめき明易し

山下ユリ子

融雪や未来大河の水一滴
啓蟄に苦闘明らか練羊かん

吉住光弥

銭洗ふ弁天の水菊の花
有明の月を仰ぎて卒寿かな

山田美佐尾

水芸や首を傾げる春着の児
水明は千百号の五月かな

綿貫ひさの

朧月水の如き酒を注ぐ
冴返る節電の夜の星明かり

山中いちい

手術後の一滴の水冬銀河
冴返る駒の一手や明と暗

綿引まりこ

三月や淡き絵の具の水彩画
ただいまと明朗な声春シヨール

湯浅 和

水底の紅葉乱して水馬
跼むれば馬酔木の花の薄明り

和田仁八郎

水色の靴おろしたて山笑ふ
青き踏む水明といふ大家族

柚木治子

句集喝采

近藤徹平

◆高崎公久「青」

文學の森

著者略歴 昭和十四年福島県いわき市生。同五十三年「蘭」入会。野澤節子・きくちつねこに師事。平成十六年編集長。同二十八年主宰継承。句集『青鬢』『青滝』既刊。現住所いわき市。

著者はあとがきに「青は、私の精神の色であると同時に、体内を駆け巡る血の色であると思っている。古代日本語では、固有の色名としては赤・黒・白・青のみで、明・暗・顕・漠を原義とする。青はある語に冠して若い・未熟等の意を表わす。本句集は青を冠した語に当て嵌ると思っている」と記す。

青が溢れて針葉樹林瞳に涼し
船が巡る夏の松島青無限
刈田さみし山雨の青が沁み込みぬ
新仏の安穩願ひじやんがら舞ふ
牡丹供養赤炎青炎は二人の師
楽器すべて鳴る終曲や春を待つ

第一句は標題句、針葉樹林の清々しい青。第二句、鳥を挟み空へ海へ広がる青。第三句、青い山に囲まれた秋雨に煙る刈田の景。何れも未熟とは全く無縁の句。第四句、じゃんがらは著者の住むいわき地方の行事で新盆の家を巡る念仏踊り。第五句、著者の近傍の福島県須賀川牡丹園が始まった行事の句。第六句、終曲へ向けてフルオーケストラが鳴り響く景を詠んだ句で巻末句に相応しく豪華。

◆松下道臣「二字」

ふらんす堂

著者略歴 昭和十六年東京都下谷稲荷町生。同三十九年「齒車」「暖流」入会。同六十二年「雷魚」創刊同人。平成九年「萱」創刊同人。句集『まんまる』『足形』『憤怒』既刊。

著者は句集の帯に「衰えを表現するのは難しかった。それと恰好をつける自分が居たので勇氣も必要だった。身体の自由が少しずつ失われてゆくのを支えてくれた多くの人々にありがとうを言いたかったので本句集を編んだ」と記している。

苦戦せし九九の九の段栗ごはん
雁渡し後の始末をして措くか
初日の出たてよこななめ顔に皺
春の闇二度目の不惑杖つきて
あーあー粗相の尿のあたたかし
書初の感謝の二字は選びし字
春を待つ腕立て伏せの腕立てて

忍び寄る老いに真つ正面から取り組んだ句が頼もしい。第一句、簡単な暗算にも手間取るようになった。第二句、そろそろ終活を済ませる。第三句、顔に皺がまた増えた。第四句、ついに不惑の二倍の満八十歳になった。第五句、排尿神経が加齢現象で勝手に暴走しても楽しい句に仕上げて見事。第六句、標題句でひたすら感謝。第七句、巻末を飾る句だが、腕立て伏せとは素晴らしい。後期高齢者諸君、まだ頑張るぞ。

山本鬼之介 選

水明集

忠義なぞ今は流行らん建国日
隴夜や義賊の墓石撫で回し
春浅し前頭葉が武者震ひ
春早き「熊出沒」の絵看板
片栗の咲くや巴里よりエア・メール

さいたま 染谷正信

紅梅や遅れて歩く妻を待つ
紅梅や源氏堀より三味の音
草萌ゆる父の墓より母よぶ声
春日傘水切り石の小気味好し
直送便に乗せて能登より蜚鳥賊

渋谷きいち

さいたま 山岸久美子

寒燈や針持つ母の影遠し
陽に透けて花片はルビー寒椿
姉妹着る服の数々針供養
ほろ苦き思ひ出誘ふ春霞
日溜りの庭の片隅猫の恋
春浅し色付け前の土人形
半玉のか細き手首春浅し
春浅き山に罎警へリコプター
石鮫玉きれいな姉の嫁ぐ日も
煌々と進学塾の二月かな

上尾 横山君夫

半仙戯地平を越えて浮かびけり
日と月の恋の鞘当て春の潮
義仲寺の芭蕉の墓や鼓草
戦やぱくり開きたる噴火口
春菊を茹でたれば青極まればり

さいたま 反町 修

春の日の水平線を探しをり
春の日のひかりこぼるる水面かな
淡雪のうちかさなりて消えにけり
黄水仙隅に置かるる保健室
薄明の一隅照らす黄水仙

元田亮一

高千穂の山並遙か建国祭

さざれ石碑文読みあふる建国祭

春雷や牛久大仏泰然と

兄嫁の久留米緋に春の雪

春の風邪開きしままの文庫本

さいたま 村杉清吉

残雪の崩るる音や響動めきぬ
落日に映ゆる残雪滑降す

さいたま 西幅公子

春の野へ牛追ひ立つる牧舎かな

路の臺ばくりと虫に先越され
路の臺日向の山に起き上がる

熊谷 越田栄子

平塚 丸屋詠子

春光の小川さざめく和紙の里

春駒の跳ぬる牧場の土柔し

春色や有機野菜の育つ畑

穏やかな空へ野焼の燻りゆく
色めきて黒白茶トラ猫の恋

月おほろ能面飾る大社かな
泰平の世の古戦場水温む

春の夜やドラマの「寅」に泣き笑ひ

水晶磨く熟練の技春浅し
水晶をまとふ観音お中日

さいたま 梅澤輝翠

若狭 檜鼻ことは

吉兆やお腹に稚児桃の花

春寒し蔵に残りし通信簿

汐まねきテトラポッドに追ひこまれ

春浅し鳥の餌箱を新しく
蜆汁口割らぬ奴二つ三つ

この村は比丘尼の故郷寒椿
春寒や風にまかせるほつれ髪

ふらここや地に着く足を離せぬ子
小三治を聴きに行きたし春隣

酒蒸しの汁まですすす浅蜷かな

階を避けるこのごろ建国日
削らるる義賊の墓石春の雪

オलगール鳴らせば義姉を朧月

ハミングの女建国記念の日

鼻声のマダムの電話春の風邪

橋本京子

さいたま 曲淵徹雄

ビル風をつるむ十字路冴返る
冴返る碧天を刺す避雷針

石塔を離れぬ鴉春寒し

春浅し古都に訪ぬる薬師堂

大空へどれも健気に石鹼玉

旅客機の窓から雪の剣ヶ峰
荒海やなだりに映ゆる冬椿
六畳の小夜を滾らす歌留多取
楼門へ余所行きの声初鴉
餅つきの手際一際老夫婦

さいたま 保坂翔太

ゆつたりと見沼用水初霞
寒風や残る葉も無き枝の先
羽子板の出番を終へて元の箱
走り行く車夫の太股余寒かな
石庭の真白き砂に浸むる雪

さいたま 新井孝磨

ロシア語で鳴かぬ恋猫路地をゆく
野仏をすつぱり包む野火の渦
一碧の空を水面に春の色
母馬に続け春駒牧の朝
明眸は母親ゆづり春の駒

高崎 原田秀子

陽炎ひて天女が紡ぐ草の糸
寒灯や工房に見ゆ人の影
春一番梢がフラを踊り居り
春めくや片手ではづす前ボタン
春灯を掬ひ湯船に瞑想す

清水桂子

紅梅や選挙ポスターみな笑顔
主なき京寂庵の余寒かな
紅梅や故郷捨てたるその時も
下萌ゆる炭坑あとの引込線
下萌や子の背に余るランドセル

さいたま 新 曆文

寒風に押され酒場へ直行す
番外の余興は客が凍ゆるむ
立ち話足より上る余寒かな
紅梅に顔寄せ花と息交はず
野仏や春の足音たしかなり

篠崎紀子

残雪の形を目安に野良仕事
薄氷の池に動かぬ魚の影
畦を焼き缶コーヒを一気飲み
野火を追ふ消防団の声高し
猫柳少女の丸きイヤリング

笹本啓子

ひだまりや凍蝶ちつと見張る猫
ひだまりの光集めて梅匂ふ
節分の門に掛けたる鬼の面
独活の芽や雨滴に光る山の朝
古民家の絶えて飛燕に宿のなく

加藤でん治

寒暁の明かり煌煌牛井屋

先陣を争ふ双つ寒雀

仏の座茎の紫極まりぬ

行き先を誰にも告げず虎落笛

弔問の塩置く框雪催

ほろ酔うて歌留多読む声裏返る

百寿なほ病を知らず屠蘇の酔ひ

香り秘めつつ色を育み春待てり

早春の空を切り裂くブーメラ

葉牡丹や里に息づく藍の甕

ダム底に沈みし村や初氷

バンカラの高下駄ひびき初氷

月蝕の不思議な光鷹眠る

鷹匠の手に載る鷹の威厳かな

ミイラの目の大きな窪み鷹にらむ

手向け酒福分けされて初御空

手に取れば少しざらりと寒卵

余寒なほ風に聞かるる独り言

猫の眼の野生めきたる余寒かな

恋猫の逢瀬の道や朝日影

さいたま 本橋稀香

三世揃うて二月佳日の地鎮祭
残雪の百名山をまた一つ

春寒し途絶えしままの連絡網

水筒にジャスマンティを春寒し

追ひつ追はれつ胸の高なる冬五輪

森美枝子

東風を受け程好く乾く干魚かな
朝東風や漁港に戻る船迎ふ

末黒野に息をひそめてゐる大地

一献を添へて露味噲亡き夫へ

露味噲や漸くいたる母の味

後記朝香

神々の神話紐解く紀元節
建国の意義考へる建国祭

春菊や初恋の味ほろ苦し

梅咲くや走る義足のアスリート

春菊の白ごま和へに飯二膳

池田珪子

春一番手押し車の婆二人
熔接の火花哮るや木の芽雨

岐神の傍に突つ立つ寒灯よ

夕間暮庭の寒灯また点かず

片道の切符かくしに二月尽

さいたま 竹澤和子

岡田宣子

千坂平通

飯田忠男

犬ふぐり暗渠の向かうは隣町
裏返し湖畔の小舟春浅し
歪さも味ある小鉢木の芽和
犬ふぐり側室の墓控へ目に
不定期に来るキッチンカーや春浅し

さいたま 田中泰子

白魚の命まるごと光りけり
干されても銀光纏ふしらをか
日差し浴び病苦を忘れ春めけり
欠伸してふくよかな人針供養
親の顔まだ見ぬしらを食しをり

川口 新井のり子

足音に光る魚影や春氷

杉戸 佐々木史女

春隣面接の日のミニスカート
沈丁の香る千里の夢路かな

越谷 阿部幸代

薄氷や岸辺を飾る走り根よ

小さくも歩幅しつかと青き踏む

古利根の波にゆらるる鴨の陣

玄関をオアシスと化すヒヤシンス

青文字の蕾つぶつぶ浅き春
春一番もののけ騒ぐ屋敷跡
片付くる暇のなくて春炬燵

土埃路肩に残る雪よごし

若狭 山崎郁子

薄氷やブルーブラインの小競り合ひ
明日見へぬ鼓動鎮めよ梅の花

伊予 向井章子

春一番身に覚えなき足の痣

立ち話しつつ愛である梅の花

撫で肩やふはりと絹の春シヨール

年とれど身形は老いず春シヨール

サキノホン湯豆腐踊る南禅寺
国境は河鞆の高く舞ひ
枝垂梅奥より漏るる機の音

甘やかに搦め捕らるや丁字の香

さいたま 菅原真理

せがまれて落暉へ放つしやぼん玉

伊奈 菅原卓郎

夕映えの街が燥ぐや春めきぬ

陰雪に食ひ込む朝のハイヒール

銀輪は追ひ風まかせ春をのせ

春寒の群れて寄る鳥波の上

野晒しの半鐘揺する春一番
晴天に禰宜の声澄む午祭
北国に春一番とメール有り

立春や木々の日面我先に
竣工の家に風入れ春来る
白梅や明けむと思ふ夜半の庭
白梅に紅梅滲む山のすそ
匂鳥留まる梢のしなひけり

さいたま 小林京子

「早春賦」小声で歌ひ春寒し
穴場かな去年に増して露の臺
セピア色の地にぼこぼこと露の臺
大吉を財布にたたみ初詣
新婚の植ゑたるミント春浅し

さいたま 森下美智枝

朝東風の伊豆の海岸磯光る
朝東風にバルーンのそよぐ青い空
紅白の梅咲き競ふ長屋門
大試験お守り三つ持たせけり
偶然に過去問が出て大試験

木村るみ子

音の無き第一学食春浅し
草を食む牛の鼻先春の泥
走り出す踵捉ふる春の泥
出かくるか止すかと迷ふ春の泥
春の泥上目遣ひの反抗期

東京 山中いちい

遠山のはだら眩しき今朝の窓
看護士の語るふるさと春の雪
雪富士の一気に染まる冬夕焼
母に似る老女目に追ふはだら坂
ひとときを春の残照ながす浜

横浜 山岸弘子

耳よりの話あぶなげ春寒し
春浅し鎮守の杜の風の色
春浅し一夜城見ゆ天守閣
しやぼん玉宇宙の果まで飛んで行け
親の思ひを知らぬ子の吹くしやぼん玉

春日部 仲田利子

寒燈下玄関の鍵滑り落ち
寒燈下駅ピアノ弾く青年よ
賑はひや片山里の梅まつり
片思ひ告ぐることなく卒業す
今朝の庭掃き清められ沈丁花

さいたま 野村美子

成分調整牛乳臘月
充電のあと少しだけ春日和
しやぼん玉握りしめたる詩人かな
劇場の閉鎖を知らぬ浮かれ猫
薄氷へピンククレシート落ちゆけり

さいたま 吉川拓真

雨降りてうなだれしほむ黄水仙
黄水仙我にほほゑみ背中押す
春の日や鳥もかしましなほ人も
春の日の浮き足立ちてつまづけり
温かき風が君かと春の日や

さいたま 鈴木香音子

階段に寒さを堪ふる患者かな
雪降りぬ黒き一羽のまつしぐら
日のさして春めく雪や屋根すべる
徘徊にあらざ通院春の風
小川まで枝伸ばしたし梅だより

さいたま 和田仁八郎

カタクリの花愛でし日に大地震
気塞ぎの夫のひとこと冬晴れ間
江戸古地図繙き歩く冬日向
合掌造り雪の厚さと白さかな
諏訪湖には不思議なるもの御神渡

東京 畑宮栄子

下萌や天地返しの鋏の下
なほざりのバイパス緑地草萌ゆる
初午やIH厨に火防札
屋根にはらり消へゆく貨車の春の雪
風光る古墳を護る埴輪群

斎藤みよ

しやばん玉小錢握つて紙芝居
横丁の菓子屋の御負けしやばん玉
卓袱台の団欒何処石鹼玉
春浅き益子の急須欠けしまま
春浅し母の面会ガラス越し

春日部 諏訪サヨ子

春の日や風に追はるる竹ばうき
春の日や変化に気づく君の嘘
朝寝坊うれし半分小言聞く
朝の庭春を探しに小鳥来る
一張羅寒さも一夜春浅し

草加 持永喜夫

春シヨールなびかせ駅へ弾む息
鮎の群潜む水底春浅し
漣に音符つけたし春の海
滑走するエッジの音やスケーター
春めきて菩薩の笑みの柔らかし

草加 外村紀子

露味噲やまだ超えられぬ母の味
残雪が行くて阻みし山路かな
冬空仰ぎ受験結果の報せ待つ
年をとり苦味旨しや露の臺
料峭にラジオ体操さぼり癖

さいたま 小川洋子

雛壇やテディベアも座りをる
春雪や花咲くやうに四方の山
今生に二人となりし鬼やらひ
自愛てふゆたんぽ足でひきよせり
春寒くとも空の色やはらかに

鬼石 榊原聰子

針供養日の当たりゐる指の先
白魚の目の輝きを掬ひけり
縫ひ物の苦手の我や針供養
折れしまま豆腐に刺して納め針
白魚を躍り食ひせし友の笑み

さいたま 遠西勢津子

銃口のまたぎの目線にうさぎの目
袖の道またぎの腰のうさぎの目
破るだけ破れ障子吾子三歳
節分の鬼も聞くや子のバイエル
長回廊雑巾しぼる僧の胼

小浜 松島寛久

海釣りの糸に波紋や春の色
浮き島に小さき祠や春の色
浜名湖に春の光のみなみと
春駒の瞳に映る地球の色
春駒の岬に立つ背大人びて

東京 飯室夏江

曲芸にくぎづけ小さき冬帽子
朴訥と若き湯守の冬帽子
かたかごのひとつひとつの嫺やかに
かたかごの反りて見返り美人かな
小声にて福は内のみ三粒づつ

川崎 鈴木玲子

逆上がり熱き声援下萌ゆる
下萌や母に応ふるシルバーカー
合格は一斉メールで受け取りぬ
露味噲と土産話も貰ひ受け
白梅やベツドの名前外されし

さいたま 山戸美子

恋人と言ひたきひとを春なれば
調律の音が迷子の春疾風
急行に胸騒ぎ乗せ雨水の夜
街は春永く暮らすも異邦人
末黒野の焼け残りゐる草の根よ

吉川 杉浦理恵

一筆の優しさ伝ふ賀状かな
めでたさの一句を添へて初日記
うかうかと過ぎし記念の七日かな
七草の香のほのぼのと粥の湯気
大寒や温もる縁にひとねむり

水野興二

白魚で一杯いこか若旦那

川口 田村福美

春泥にまはれ右して一輪車

さいたま 山下ユリ子

白魚の透き通る身の愛らしさ

二月尺猫のまるみのゆるみたり

苦虫をかみつぶしある春羅漢

兄弟の諍ひの種春の泥

針供養齡重ねて針重し

コ罗纳禍に外出はばまれ春の泥

供養するほどはなけれど針祭

二月尺種まく人となりにけり

悲しみの深く美し涅槃雪

大阪 飯塚智恵子

まばゆきは薄氷翳し見る世界

森 和子

帚持てくの字の老女浅き春

指先で突き手桶のうすごほり

蝨梅や記憶の中をかをらせて

山谷を映し薄氷耀きぬ

吹きすさぶ荒野に香る野水仙

末黒の芒夜来の雨に尖りたる

たこ焼や童に続く寒雀

末黒の芒男児生まるる知らせかな

根気よく歩く熟女や春浅し

和歌山 南條きわゑ

頬被ざるを抱へて安来節

湯浅 和

節分や鬼面吊して払ふ邪気

おはやうと頬被解く野良仕事

大ジャンプ空に飛び立つ二月かな

猫柳撫づる老母の指の先

立春や料理競へば笑み増ゆる

老梅や樹皮一重にも蕾あり

辛夷咲く子にことわざを説きにけり

濃き匂ひ一本の梅山満たす

けん玉の真中に入りて春近し

東京 柳父はる

介護所の母に微笑梅便り

鈴木藻好

土手焼きの斑模様になりにけり

菜の花やスマホで写すツーショット

探梅の花芽も見えず愚痴ばかり

明け暮れの雲間に覗く春満月

白梅の初めの香り背筋伸ば

春一番主の目窺ふ黒き猫

まんさくの花見る人の静かなり

草焼くや出直し誓ふ落第生

梅の香に誘はれいつか峠道
春隣硝子戸過る鳥の影

さいたま 福田育子

山並みを擁し夕富士二月尺
野梅の香山懐は静かなり
路の臺狭庭なれども主人公

梅東風や子の駆け登る男坂

綿貫ひさの

大試験「がんばれよ」とは声にせず
節分や一升榊の出番あり
「ここは何処」独語は桶の浅蜷かな
手作りの古拙な壺や山椿

宮代 関谷多美子

春浅き玻璃戸引越荷物積む
母が魂翔び立ちし夜の沈丁花
一人居の父雨戸繰る沈丁花
浅春や旧知の友の喪を見舞ふ
如月や十九歳棋士五冠成す

和歌山 高橋満耶子

涅槃西風おなじ体勢鳩の群
またひとり帰らぬ人に花辛夷
スキージャンプ明暗わかつ二センチよ
競技場に魔物いるらし冬五輪
涙と笑ひマスクに隠し聖火消ゆ

樽底に古葉現はる寒の明
立春や駅路行き交ふ脚美人
種飛ばし老若競ふ梅の丘

さいたま 秋谷風舎

比企の里犬に連れられ枝垂梅
向かひ東風苦勞厭ふない大人

小さき花寄り添ひ大き黄水仙

川島夕峰

春の日や大あくびする猫と我
猫横たはる危ふしや黄水仙
大試験あまくみるなよ塀の猫
春の日や少し帰宅の遅きねこ

強風に帽子舞ひけり二月尺
道端に小さき花や二月尺
ふうふうとうどん食せり二月尺
春泥や長靴の吾子大はしやぎ
春泥をつま先立ちで歩きけり

横山礼子

無下にせし諸諸のこと桜餅
蕾なき枝を朝東風揺らしをり
この先はひとりの大人大試験
人世に補助線あらば大試験
梅が香を枕に移し美しき夢

太陽の光の中の露の臺

水仙の小さき花芽顔を出し

初午や自転車で来る種屋かな

おしめりの後は元気に露の臺

穂の芽の青々したる命かな

探梅や鶏鳴長く谷戸の家

探梅や遠く川音聞きながら

探梅や野鳥を探るフアインダー

白梅の一輪二輪とびとびに

初釜や松風の音吹き渡る

寒林の日当たたる場所に犬を待つ

立春や命の動き見ゆる時

梅の香や窓全開の深呼吸

梅の香に庭の草木も目覚めけり

旅の宿眼下に冬の太平洋

立春に声立て笑ふ赤子かな

こちら向き我に微笑む黄水仙

春光や犬も常より遠くまで

二重跳びいとも軽がる春の色

ままごとの母さん忙し春の色

春駒の尾のつやつやと母似なり

鬼石 加藤ナヲ子

東京 水落守伊

さいたま 奥山粉雪

石浜悦子

緒方みき子

下萌やリールいつぱい駆くる犬

紅梅のふふむ古木の威厳かな

落款になりゆく石や春浅し

下萌に弾む散歩のスニーカー

堂々と狭庭に一景初鴉

川底に夕陽沈めて寒明けり

啓蟄や散歩再開白い杖

枯木なる残る命や梅紅し

女ふたり御薄の席の寒紅梅

索索と記憶に刻む冬の霧

コニヤツクの香りの裏む春の闇

夕東風や右頬痛さう道祖神

賑はひの残る遊具や春夕日

春の日や子のピアノ聴く夢の時

春陽や埠頭に座りメロンパン

うたた寝の春日の猫に笑みこぼる

我道を末黒の芒に連ねたる

細き傷末黒の芒に指刺され

薄氷や漁業の人夫勇み立つ

命有る末黒の芒息吹きぬ

さいたま 鳴海順子

藤沢 小島喜代子

さいたま 霜多光代

鈴木敦子

落合和枝

春日や気球に乗りて雲を見る
抱つこして扉開ければ黄水仙
春の日に江ノ島向かふ車窓かな
春日かな席譲り合ふ姿あり

さいたま

山川 順

風花をばつくりぱくり味見して
行く春の金継ぎカップ老もよし
おもひあつたひとの傘に牡丹雪
ジェット機のうなり遠のく春の夜

さいたま

安藤みえこ

静かなる寝台列車冬の星
春の日の護摩の炎を見つめをり
寝返りの赤子遍く射す春日
二月尽ささくれ指も息をつく

橋爪さなえ

所沢 関根千恵

華奢な首風雪に耐へ黄水仙

河井育子

水仙の香の立ち上り明日は雨

大阪 遠藤人美

黄水仙今年見つけし迂回道
花屋にてひかへめにをり黄水仙
白き雲日の匂する春布団

男手の益々太る味噌の玉
福音や縮みはうれん草卓へ
まつすぐに署名頼まる多喜二の忌

金柑に群がる鳥に目覚むるや

和歌山 嶋田洋子

二枚目の鼠小僧の頬被

さいたま 武田重子

味自慢の主婦の歳月ぶり大根
風花を突き抜け飛ばす救急車
独り居の窓をつんつん寒雀

煮凝や温みの夫へ感謝せり
アトリエのモデルの少女手に椿
まんさくや少女の髪絡まりし

春一番公認目指し暴れたり

さいたま 小駒さち子

もうすぐよ草木ささやく庭二月

北出久美子

大試験時計ばかりが気になりて
桜東風おしやべり弾むアヒル坂
梅東風に香りを寄せて母の部屋

きさらぎのこつくりこくりする時間
初午や入日の翳りいまだ濃く
初午や供物のあぶらげ狙ふ鳥

筆箱の梅のえんぴつ大試験

梅東風や付箋しわしわ色褪せて

東風強しくくるくる回る風見鶏

縁側の日差し暖かたまご色

残雪の光をはなち兼六園

踏み入れば今ころあひの露の臺

ままならぬ指に息かけ露の臺

東風吹かば開き縮むる肩甲骨

子の笑みに補欠の報や大試験

赤糸の輪廻転生桜餅

春の日や苺のパフェに八つ当り

春の日や鋤取り土を拳ほど

黄水仙ウツドベースに揺れてをり

世は揺らぐまつすぐに立つ黄水仙

密になり何を語るか黄水仙

野の花も心も開く春日和

☆

☆

さいたま 樋口元美

森山洋子

糸井しるく

山崎真由美

小田美智

特集 新人賞作家大集合!

特別企画 滑稽俳壇二十周年 回顧と傑作選

巻頭作品10句

上田日差子・小川軽舟・權未知子
鹿又英一・島村正・名和未知男
野木桃花・松岡隆子

俳壇

6月号

5月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ

大竹多可志

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅲ期」：松尾隆信・長嶺千晶

色の歳時記……………坊城俊樹

俳句文法 そこが問題、
そこがポイント……………井上泰至

連載 俳句史を見直す……………秋尾敏

ものがたりのある俳句……………村上頼彦

先人のことば……………和田華凜

小説・遙かなるマルキーズ諸島……………マブソン青眼

俳句と随想12か月 河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

作品評

山本鬼之介

春浅し前頭葉が武者震ひ 染谷正信

戦いや重大な場に臨んだ時に、心が勇み立って身体が震えることを言う「武者震ひ」であるが、震えるのが「前頭葉」であることに近代的な俳諧味を感じる。周知の通り、前頭葉は、人として正常に生きてゆくための諸機能を司る脳の最重要部位であり、我々俳句に携わる者にとつては、特に関係の深いものと言えよう。いざ出陣の句会を前に、日頃鍛え抜いた前頭葉が、出走前の競走馬のように勇み立っている様子を、まだ寒さの残っている季節感を織り交せて巧みに詠んでいる。

草萌ゆる父の墓より母よぶ声 渋谷きいち

木々が芽吹き草が萌え始めた早春の墓苑である。墓石を洗い清めていると、何処からか人を呼ぶような声が聞こえたような気がした。自分の空耳なのか、いや、確かに聞いた気がする。疑問を巡らす内に、『そろそろこちらへお出で』と、高齢の母を招いている父の声であったのだろうかとの思いに到

った。生前に仲睦まじかった妻との再会を待つ夫の声である。

陽に透けて花片はルビー寒椿 山岸久美子

早春に咲く椿にさきがけて咲く冬椿である。江戸期の歳時記や季寄せにも掲出されており、鮮紅・桃色・純白・絞り模様・一重・八重など、色や種類が豊富で、それらの花が寒気の中に咲く様は印象深い。紅色の花であろうが、陽に透けた花弁を宝石のルビーと見立てた感覚が佳い。

春浅し色付け前の土人形 横山君夫

土人形はその名のとおり、土を材料にした人形で、日本各地の市町村の物産品として種々様々な土人形が作られ販売されている。江戸初期から続いた粘土製の精巧な彩色人形である「博多人形」もその一つである。

余寒の工房で、造形後に乾燥され、最終の色付け工程を待っている実に素朴な人形たちである。これからどんな美人が生まれるのか楽しみである。

日と月の恋の鞘当て春の潮 反町 修

久し振りに粹な言葉に出合った気がする。恋の鞘当てとは、二人の男が一人の女を目当てに争うことで、本句の舞台では、水平線に没して行く太陽と、輝き始めた月である。さて本命

の女はと言うと、「春の潮」から察して、沖合の座礁に座している人魚姫であろう。

春の日の水平線を探しをり 元田亮一

単純に解釈すれば、水蒸気の多い春の日の海を見ていて、空と海水が接した水平線の見分けが付かないということなのだ。だが、作者が言いたいのは、そんな安易なことではないだろう。だとすれば、どのようなことなのか。作者は、心の中にきりつとした理想的な水平線を描いているが、その日の水平線はなかなかその条件に合致しない。という答を出してみたが、如何なものだろう。

兄嫁の久留米絣に春の雪 村杉清吉

清楚にして胸の高鳴りを感じる俳句である。男性にとつて兄嫁の存在とその思いは如何なるものであろう。兄嫁と義弟の年齢や年齢差によつても違いがあると思うが、義弟は実姉に対するものとは自ずから異なる感情を兄嫁に抱くであろう。掲句の久留米絣は、義弟に対する兄嫁の優しさであり、春の雪は、兄嫁が義弟に示す柔らかな拒絶なのである。

春光の小川さざめく和紙の里 越田栄子

暖かな春の陽射しを受けて命あるものが動き始め、冬

の間ひっそりしていた小川も、少女たちのお喋りのように明るく賑やかになってきた。観光客が和紙づくりの体験を楽しむ埼玉県比企郡小川町の「和紙の里」の情景が鮮明に見えてくる。

春寒し蔵に残りし通信簿 梅澤輝翠

久し振りに実家を訪れ、何かお宝でもと蔵の中を探索していたら、学生時代の通信簿が出てきた。学科によつて、驚くほど良い評価であったり、まあまあであったり、うなだれるほど酷かったりと、今ではどうでもよいことであるが、その当時は、一喜一憂した通信簿なのである。蔵の中の肌寒さも忘れ、思わぬ楽しい時間を過ごすことができた。

オルゴール鳴らせば義姉を臚月 橋本京子

おそらく発条仕掛けのクラシックなオルゴールで、嫂が生前大事にしていた遺品なのであろう。忘れかけていたその曲から義姉の顔が浮かび、自分に語り掛けてくるように感じた。窓辺に寄れば笠がかかった朧月が出ていて、恰も義姉の笑顔のようであった。

春の野へ牛追ひ立つる牧舎かな 西幅公子

山裾に広がった牛の放牧場である。待ちに待った春を迎え

て青草が野原を埋め尽くし、牛を育てるのに最良の季節となった。数棟の牧舎から牛が放たれ、草原へと誘導されて行く。日の暮れるまでゆったりと草を食む牛の群である。

泰平の世の古戦場水温む 丸屋詠子

屋島・関ヶ原・川中島などを筆頭に、日本各地に大小様々な古戦場が遺されており、その史話が語り継がれてきた。この句の古戦場が何処にあるのかは定かでないが、その中を川が貫いている地形なのであろう。戦のあった時は、川が血で染まったかと思われるが、今は両岸に青草が茂り、長閑な景觀を呈している。

酒蒸しの汁まですすする浅蜷かな 檜鼻ことは

新鮮な砂抜き浅蜷の酒蒸しは、飲兵衛にとつては最高の肴である。上品にやっついては折角の熱々が冷めてしまし、旨味が逃げてしまう。浅蜷を直接抓んで口に持って行き、身を食って貝殻の汁をすすするのが最良である。最後に、深皿に残った汁を飲めば言うこと無しである。酒飲みにとって、臨場感を共有できる俳句である。

冴返る碧天を刺す避雷針 曲淵徹雄

立春を過ぎてから戻ってきた寒さを、冬の寒さよりも一段と厳しく感じることもある。碧く澄み渡った空も冷たさを呼ぶ。普段雷の鳴る時以外は存在感の薄い避雷針であるが、寒々とした碧天と対峙して存在感を示している。

荒海やなだりに映ゆる冬椿 保坂翔太

荒波が押し寄せる冬の日本海を想像する。陸地から海へ切り込んで急な斜面に咲く冬椿が実に鮮烈で、その景色を一層引き立てている。

野仏をすつぱり包む野火の渦 原田秀子

渡良瀬遊水池や安曇野、阿蘇山の草千里など、野焼が行われる所にある野仏は、毎年の野焼の度に焼かれてしまうのだろうか。石仏であろうから、燃えて無くなることはなからうが、煤まみれになると思うと胸が痛む。しかし、別の御利益があるのかも知れない。

紅梅や選挙ポスターみな笑顔 新 曆文

そう言われてみると、選挙ポスターの候補者の写真は皆柔和な笑みを浮かべており、どの候補者にも好感が持てる。考えてみれば、専門の写真技能者が撮影にあたり、写真修正

も為されているだろうから、当然のことかも知れない。満開の紅梅が枝を差し伸べた塀に掲示された選挙ポスターを見た作者の実感であろう。

畦を焼き缶コーヒを一気飲み 笹本啓子

田圃の畦に残っている枯草を焼いて害虫の卵や幼虫を絶滅させる畦焼である。野焼ほどの迫力は無かろうが、広い水田地帯で一斉に実施されればかなり壮観であろう。ビールの一気飲みにあらず、缶コーヒの一気飲みとは可愛げがある。

走り行く車夫の太股余寒かな 新井孝磨

浅草雷門に待機している観光人力車夫が思い当たる。立春後の寒さの中を、太股むき出しで駆ける若い車夫の威勢の良い姿が彷彿される。

春灯を掬ひ湯船に瞑想す 清水桂子

広い浴槽にゆつたりと身を沈め、眼を閉じて物思いに耽っている様子が伝わってくる。俳人の作者としては、兼題句の創出に集中しているのかも知れない。「春灯を掬ひ」は、灯火の映っている浴槽の湯を掬って顔にかけている所作と受け取れる。優雅な雰囲気伝わってくる。

立ち話足より上る余寒かな 篠崎紀子

ごみ出しの朝近所の主婦と一緒になり、お決まりの立ち話が始まった。ほんの一寸の積りが何時の間にか一時間ほど経ってしまった。重ね着して出たので身体は大丈夫だが、足の先から上ってくる寒気はどうしようもない。

ひだまりや凍蝶ちつと見張る猫 加藤でん治

窓枠にじっと止まっている冬の蝶。それをじつと見ている猫。そして、その両者をじつと観察している作者。面白い構図である。

寒暄の明かり煌煌牛井屋 本橋稀香

深夜営業の牛井屋であろうか。冬の明け方でまだ辺りは暗く、店内は昼間のように店内の照明が明るい。まことに無駄の多い困った巷であると嘆く。

百寿なほ病を知らず屠蘇の酔ひ 森美枝子

日本人の男女ともに寿命が伸び、金さん銀さん時代の百歳は珍しくなくなった。百寿を迎えて特段の病が無く、屠蘇でほんのり酔うとは、まことにめでたいことである。

水琴窟

(水明集三月号鑑賞)

池田雅夫

雪吊の松凜として整ひぬ

山崎郁子

三名園の一つ、金沢の兼六園の「雪吊り」は冬の風物詩としてあまりにも有名。松の枝を雪から守るために一本の棹柱を中心に、放射状に縄を張りめぐらす雪吊りの美しさは比類がない。名園の品格、職人の技すべてが整っている。

見るうちに夕日呑み込む枯木山

山岸弘子

冬の夕日の沈む早さはとくに早く感じられる。写真を撮らうと操作していると、あっという間に沈んでしまふ。真っ赤に燃える夕日に枯木が燃え尽きるのではないかと思う。掲句は「夕日呑み込む枯木山」と、枯木山を主役に行っている。

長旅を寄り添ひ癒す小白鳥

諏訪サヨ子

十一月ごろ、シベリア地方から渡ってくる白鳥。その長旅の無事を喜び、寄り添い労らっている姿がいらしい。ねぐらとする湖沼、河川などに群れて「寄り添ひ」「長旅」の疲れを癒すのであろう。甲高くはない「小白鳥」の声である。

休耕田を皎皎と差す寒満月

飯田忠男

「皎皎」は「皓皓」とも書く。その使い分けは感覚的なものであろう。いづれも、月の光などの白く明るいさまを表わす。「休耕田」を「皎皎と差す」様に冬の厳しさがある。

鷹の目やビルの谷間の新狩場

小駒さち子

「鷹」の類は種類が多く、隼、刺羽なども猛禽類の仲間である。鋭い嘴と爪を持ち、鳩や鼠、蛇などを捕えて食す。山林などが開発で次第に消滅したせいもあり、近年は立ち並ぶビルの谷間が小動物狙いの「新狩場」となってきた。

老僧も餅搗きの中たすき掛け

松島寛久

「老僧」とは自身のことか。正月を迎えるのに「餅」はなくてはならぬもの。鏡餅、のし餅、切餅などにする。隣近所が何軒か集まって餅搗きをしている。その中に「老僧」も加わってほほえましい光景。「たすき掛」の名詞形と思う。

イニシャルは赤に決めたり毛糸編む

飯室夏江

西塔松月の句に〈愛情を形にしたく毛糸編む〉がある。寸法を測って体型ピッタリに編んだり、好みの色に統一するなど、人それぞれに愛情表現が違って当然。「イニシャルは赤に決めたり」に、気持ちの若さと愛情があふれている。

冬木立雲に届きし鳥の声

鈴木香音子

落葉し尽した枯木とちがい、「冬木立」は常緑樹をも含む。枯木で鳴く鳥の声は遮るものがなく天にも届きそう。だが、天敵に見つかり易い。「冬木立」とすることで鳥の隠れ場所、生息の場所を表わし、そこに生命力を詠んでいる。

店先の夕日に染まる蕪かな

北出久美子

この蕪は赤かぶにちがいない。そうであってほしい。蕪はおおかた白色であり、葉をつけたまま三〜五個を括り、売られている。透き透るような白さに夕日が映っているとも考えられるが、赤かぶであればいつそう鮮やかになり趣がでる。

冬薔薇 一輪門に首もたげ

南條きわゑ

冬のばらのすがれた莖に一輪だけ深紅の花をつけている姿は、夏のばらの華やかさとちがった風情がある。何かにすがっていないければ倒れそうな、か弱さも魅力である。「門にもたげ」て風を凌いでいる。「もたれかかる門」など工夫を。

弓弦のしじま切り裂く寒稽古

川村 治

きりきりと引き絞った弓弦（ゆんづる）の力感を余すことなく捉え詠んでいるみごとさに感動した。まさに「しじま切り裂く」の静と動が寒稽古の奥技に迫るものにちがいない。

にごり湯に浮かぶ黄色の冬至の香

橋爪さなえ

直接に「ゆづ湯」「冬至の湯」と言わずに推敲した様子がかがわれる。このように間接的に表現しようとする努力が力となる。「冬至の香」の工夫を賞賛するが、まだ完成形ではない。言葉の要素を減らす余地があると思う。

朝の空堂々と鷹弧を描く

樋口元美

鷹とならび鷹の威風は他を寄せつけない。その存在感に压倒される。高みから地を見据える眼力。ひとたび舞えばその迅さに適うものなし。もの陰で身を竦めるのが精一杯。冷気漂う冬の朝の空を「堂々」と舞う鷹の姿が目につかぶ。

和菓子屋の隅に小さな聖樹かな

鈴木敦子

今では、クリスマスは代表的な年間行事の一つである。たとえ和菓子屋であってもクリスマスに無関心ではいられない。「隅に小さな聖樹」に、遠慮がちなながらも和菓子屋の気持ち表われている。おそらくクリスマス用和菓子もあるはず。

へボ将棋もう一局の湯ざめかな

福田育子

藤井聡太竜王の活躍で将棋が注目されている。老若を問わず将棋に勤む光景が見かけられる。風呂上がりの一局。勝負がついても、「もう一局」と、結局、湯ざめするはめに……

網野月を選

山紫集

果たし状めく和算の額や梅の寺

梅ひらく眼力入れて見る五輪

梅ひらく訪問診療医師若し

水攻めの土手に咲きけり梅の花

丸山マスマ

熊倉千重子

福田千春

南條さわゑ

—以上特選

紅梅や平凡に生き農の嫁

紅梅の蕾ぼつぼつ猫の道

空あをければ梅一輪のなほ深し

丹精のおぼろ豆腐や梅真白

梅二月招待状は手に重し

梅が香にしんと海馬の静まれり

井上燈女

榊原聰子

大塚茂子

越田栄子

高島寛治

横山礼子

綿飴と苦戦の親子梅祭

年老いし白梅一枝蹲踞に

堀越しのほんのり匂ひ梅二月

梅一輪南岸低気圧接近

紅梅や初恋なれど遅き婚

村暮れて梅の香満つる旧家かな

橋本京子

原田秀子

樋口元美

日高道を

藤澤喜久

保坂翔太

蔵元をとび出す一子梅の花	曲淵徹雄	売り急ぐ庭に盛りの薄紅梅	山岸弘子
ゆるやかにまとふ梅の香にじり口	正木萬蝶	富士を背に紅梅に雨高速度	山田美佐尾
村一早き白梅はこの古木	町野広子	道細き金比羅の宿梅開く	山中いちい
風止みて梅の香満つる宵となり	松井由紀子	白梅に顔つつこみてしばし居る	湯浅 和
空き家と生家はなりぬ庭に梅	宮崎紫水	風かはり一瞬匂ふ野梅かな	横山君夫
清澄な梅香流る片廊下	宮崎チアキ	床灯り梅一枝の明と暗	青木鶴城
梅匂ふ郵便受けに花卉あり	村杉清吉	梅が香や二軒隣りは水戸のひと	新 暦文
もはや訪ふ祖母亡き庭の梅古木	本橋稀香	陶房の窓辺にはのと里の梅	阿部幸代
梅匂ふ庭石にある日のぬくみ	森 和子	夜の梅一人香ぐるや男坂	新井孝磨
梅匂ふ婦系図のゆかりの地	森川義子	祈る事数多ありけり梅の宮	荒井俱子
古庭に古き梅の木咲き初める	森下美智枝	梅の香が名残愛しいかしづれ雪	飯田忠男
早朝のラインに安堵梅香る	森本早苗	盆梅の古木引き継ぐ四代目	池田雅夫

「陰性」といふ知らせあり梅日和

石川理恵

梅の花ふるはす花弁じつと見る

岡野順子

病む君の腕をからめて梅の宿

石田慶子

八十は自在の歳や梅匂ふ

加藤でん治

梅ヶ香や有るか無きかの風に乗り

井関礼子

紅梅と白梅ならば長屋門

木村るみ子

紅白に綾なす梅林浄土とも

井上玲子

白が好き梅の一枝母様へ

河野はるみ

芽出度くも紅白の梅ひとつ木に

井口俊晴

図書館へ通ふ小径や梅の花

小駒さち子

梅が香も遺跡めぐりに興を添へ

上戸千津子

梅真白腕に抱く児の片笑窪

後藤綾子

盆梅のつぼみ膨らむ城子の碑

宇田白鷺

廃村の苔むす鳥居梅の花

近藤徹平

梅の花庭にごろりと鬼瓦

内田恵子

夕の膳女将添へたる梅一枝

斎藤みよ

白梅の香り立つ里早団子

梅澤輝翠

一山を浄土の如く梅の花

笹本啓子

梅匂ふ心に残る人あまた

梅澤佐江

観梅や志ん生円生二人会

佐藤克之

師の句集座右におけば梅匂ふ

大場順子

野仏の傾く先に野梅さく

渋谷さいち

梅林の一樹に開く紅と白

岡田宣子

仲見世を逸れて川岸梅ふふむ

下川光子

老梅の荅は未だ気を持たす	菅原卓郎	庭の香や五根手向くる寺の梅	武田重子
梅真白娘も明日は白き華	菅原真理	蠟梅の香に誘はるる女の美	田中章嘉
白梅や少年の笑み透き通る	杉浦理恵	トロッコのレール赤錆梅真白	鳥羽和風
母の忌や梅の香庭に立ち込めり	鈴木藻好	白梅や出会ひと別れ行き交ふて	飛永 鼓
紅梅に故郷の名あり匂ひあり	鈴木玲子	青空に匂ふ梅花や尾根長し	仲田利子
風流の極め付きたる野梅かな	諏訪サヨ子	梅林へ他府県ナンバー続続と	西浦千枝子
薄紅梅満開村のバス通り	関谷多美子	ポップコーンこぼさじと抱く梅の丘	西幅公子
梅探り仏を訪ね秩父路へ	瀬戸雄二郎	芳しき加賀の棒茶や梅の朝	野口和子
梅の花万葉人の簪舞ふ	外村紀子	梅が香や風向き変ふる招き猫	野田静香
還暦のラテン語独習梅の夜	染谷正信	白梅や追憶の母甦る	野平美紗子
梅が香や視たり触れたり陶器市	反町 修	抱っこする吾子の手伸びて枝垂れ梅	野村美子
吉宗の気高さ今も城の梅	高橋満耶子		

山紫集作品評

網野月を

紅梅や平凡に生き農の嫁 井上燈女

つまりは「白梅」の表現では「平凡」ではないのでしょうか。梅のうち大方は、白梅であって紅ではないのです。「紅梅」を見ているうちに作者は、その稀な赤色に魅了されて、自ら白であったと回顧しているのでしょうか。ただ、後悔はしていないのです。心の安堵感を得ているのです。「紅梅や」と切れ字にしていますから、幸せな半生をしみじみ振り返っているのです。

紅梅の蕾ぼつぼつ猫の道 榊原總子

白梅が咲いてから「紅梅」が咲くと言った先人がいたのである。それも著名な俳人であったから、その影響は大である。植物学の研究者に言わせるとそれは、たまたまその個体を取り巻く条件が原因だろうと言うことであった。その著名な俳人が誰とは言わないが、咲き出した紅梅に出会ったという句意に紛れ込んだ作者が、咲き出した紅梅に出会ったという句意である。作者は、猫のいつもの通り径であることを知っていたと解釈もできるだろう。

空あをければ梅一輪のなほ深し 大塚茂子

なかなか無い景であろうと思います。「梅」の頃はまだ、春が定まっていないような空の色合いで、今年は稀に寒さが続いたり、暖かい日があったりしたから、空の「あを」色も色増したはつきりとした色合の日があったのだ。作者は、例年とは異なるその「あを」い空を確と見たのである。そして「梅一輪」をその背景に見たのだ。だから、「なほ深し」は発見で、「…ければ」は条件ではなく、状況の設定である。理屈になっていないのである。

丹精のおぼろ豆腐や梅真白 越田栄子

もちろん、庭の「梅真白」とお台所の「おぼろ豆腐」は実景である。取り合わせの句の仕立てなのだが、二物衝突ではない。配合の句の仕様は、衝撃してその緊張感の中に句の成り立ちを求めただけではないのだ。二物のハーモニーが将にびったりと符合することも句の成立の一つの条件となり得るのだ。つまり中七の「…や」切れ字は、何方かと言うと感嘆を表現していることになるのである。「おぼろ豆腐」と「梅真白」は同様の白さを示しているのではないでしょう。それぞれに白さがあるのだ、と筆者は解釈しました。

梅二月招待状は手に重し 高島寛治

何の「招待状」なのかは句中に情報はない。案内状でも連

絡でもない。結婚式の「招待状」も考えられるが、筆者は、軽いもの、例えばアウトレットもしくはデパートの催事のインヴェイションなどを想像した。これが結構、分厚いのである。厚紙に印刷されていて、質感があり、時には十何分もいっぺんに送られてきていたりするのである。上五に「梅二月」季語を置いているから、文字通り「梅二月」が作者にとつては最重要であつて、「招待状」はどうでも良い存在であるし、浮かない「重」ささえ感じる存在なのである。

梅が香にしんと海馬の静まれり 横山礼子

中七の「海馬」は記憶体としてのイメージだけではなく、情動の発現と行動、感覚入力における時空間情報の認知に関連している。つまり覚えることではなくて、要は感覚のことである。難しいことを表現したい時には、極力平明な言い方をしたい。好例である。

果たし状めく和算の額や梅の寺 丸山マスマ

和算というと算聖、関孝和を想起した。どこの寺なのかは、句の情報からは判然としないが、墓所は新宿区の浄輪寺であるということ確かめに行ったら、梅は散っていた。説明のための立派な表示板は存在していた。

上五の「果たし状」が見事です。「果たし状」と「梅」には彗星的な引力があるようである。また「果たし状」は「和算」にも通じているようだ。孝和の真摯な学究が真剣勝負の

イメージを膨らませている。

梅ひらく眼力入れて見る五輪 熊倉千重子

中七の「眼力」は「めじから」と読みたいところである。眼をしっかりと見開いて「五輪」のテレビに見入っている作者がいる。「梅ひらく」と「眼力入れて」が呼応しているのである。梅の開花と同様に作者の眼も見開かれている。これが「桜」では成立しない道理です。満開の「桜」では円らな眼へ想像が繋がらないのである。「一輪」の表現が似つかわしく、「梅ひらく」の措辞が効いている。

梅ひらく訪問診療医師若し 福田千春

面白い。「医師若し」が素直であり、その分、すくと腑に落ちる。作者にとつて「若し」なのであるうか、客観的な判断なのであるうか。分明ではないのだが、「梅ひらく」の季語の幹旋から、客観的な判断であろうと推測している。

水攻めの土手に咲きけり梅の花 南條きわゑ

戦国時代の三大水攻めは、備中高松城、紀州太田城、武州忍城である。作者のお住まいから推し量ると太田城のこのように思う。明治の廃藩置県で廃城となった跡地にはソメイヨシノが植えられたが、太田城は寺普請となり、また関係の土手には梅が植えられているのだらう。中七の「…けり」による切れが効いている。

大村節代 選

鼓
笛
集

瘦せ尾根や遠き山々霞みをり
遠霞明りがにじむ副都心
飯蛸やとらへどころの無き漢

笹本啓子

県道の深夜工事へ春北斗
長閑なり「張り紙禁止」と張り紙が
カラカラと何時はじけるか烏瓜

飯田忠男

盲目の杖に雪解け水の音
春寒の墨あたらしき塔婆かな
行き先は内緒の旅へ春帽子

檜鼻ことは

青き踏む目路の限りに葡萄棚
菜の花や史跡ガイドの赤備
鱒託の老舗に列や花の冷え

本橋稀香

各駅停車春はゆるりとやつて来ぬ
春めくや車掌の声も若やぎぬ
車窓より稜線たどれば春の富士

杉浦理恵

夕日影頼りに歩む焼野原
寒林や屋敷構への見通せる
春立つやビデオ通話の誕生日

岡田宣子

「吉」を出し幸せは中初みくじ
拘りはほろ苦さなり露の臺
愚痴りたき言葉飲み込み梅薫る

菅原真理

誇らかに中国冬の五輪終ふ
芽吹かむと銀光浴ぶる大銀杏
子の歳が記憶の柱卒業歌

山岸弘子

菜の花やしあはせ運ぶ縮緬葉
菜の花やそれぞれの地の花となる
菜の花の沖の風にも陽のかをり

雪の夜は紅きボルシチくつくつと
デパートによつて帰るか日脚伸ぶ
風信子生うるも枯るるも瓶の中

春光のあふる天窓鳥の影
春めきて夫が磨きし吾の靴
ときめきも遠くなりけり董草

春浅し旅の日取を肘まくら
春めいて夕日を包むおぼろ雲
メロンパンの匂ひ消しゴム大試験

小駒さち子

山中いちい

森 和子

樋口元美

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2022年6月号

特集

三世代俳人

受け継がれるもの

○三世代の俳句

徳田千鶴子「馬酔木」 原朝子「鹿火屋」

成田一子「滝」 山下美典「河内野」

○エッセイ〜三世代句集を作って

坂本真二・節子

特別作品21句

小杉伸一路

タラシク 俳句界NOW 津高里永子

特集 国境を越えた、

海外詠の魅力

○論考〜海外詠のおもしろさ 長嶺千晶

○海外詠セレクション 甲斐由紀子

○エッセイ 月野ぼぼな 小津夜景

○海外で詠んだ句とエッセイ

加藤耕子 中原道夫 坂本宮尾

対馬康子 佐藤文香 堀切克洋

*セレクション結社「海原」安西篤

私の一冊 矢野景一「海棠」

対談

有田芳生

(政治憲)

佐高信の甘口でコンニチハ!

「俳句界」投稿欄

一流選者15名!
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

鼓笛集作品評

大村節代

飯蛸やとらへどころの無き漢

笹本啓子

世界の食用蛸の半分以上は日本人が食べていると言われる蛸、その蛸の中でも一番小さい飯蛸。小さいながらも蛸は蛸、ぬるりと身をかまし、のらりくらりと逃げを打つ。どこぞの男も尻尾を出さない。そんな蛸みたいに掴み所の無い漢がふと気にかかる。

長閑なり「張り紙禁止」と張り紙が

飯田忠男

何という楽しい句だろう。「落書禁止」の張り紙を見た事がある。注意を引くためか漫画チックな絵まで描いてある。その下手糞な絵を見て、僕の方が上手だよと描きたくなる子供がきつといると笑いたくなった。「張り紙禁止」の効果がないと、禁止、禁止の張り紙がまた増える。

鼓笛集巻頭（四月号）

私の好きな一句（自句自解）

越田栄子

白梅や母の形見の五つ紋

息子の結婚式を控えていた頃、ふと母の形見に譲り受けた黒留袖の事が頭を過った。数十年ぶりに箆笥から取り出した留袖は、古典柄に金糸銀糸をあしらった物でした。「地味だな」と思いつつ実家の家紋を目にした時に思わず胸がいつぱいになり目頭が熱くなるのを覚えた。

梅香る季節に旅立った母でした。

行き先は内緒の旅へ春帽子

檜鼻ことは

春帽子を被つての一人旅だろうか。本人はこっそり出かけて、誰も知らないと思っているのだろうか、ところが周りは知っていても知らない振りをしてきている場合もある。内緒の旅というからには、ただの一人旅ではないだろう。アバンチュールも火傷火に懲りず……ご用心。

水明例会

第一例会（浦和）

境 延昭
茂木 和子 報

二人連れ日差の戦ぐ春の森
風光る独りバス待つ古戦場
回転ドアまづ風船の飛び出せり
青天井目ざし風船一人旅
少女立つ春風戦ぐ野の真中
天井に残る風船終電車
一斉に風船放つ開校日

徹平
マスマ
節代
順子
和葉
和子
以上特選
治子
節代
チアキ
順子
喜恵
マスマ
徹平

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映 報

恋猫の戦ひ破れ声ほそし
監督の戦術春の甲子園
心を奪ふ風船いつばい夢いつばい
まじろみし子の風船が天井に
生きるとは戦ふことよ春の空
人の世を風船輕輕越えてゆく
開店や薙めき合うてゴム風船

はるみ
和葉
理恵
延昭
光弥
稀香
和子

小走りに時の過ぎゆく目借り時
焙られて浅草海苔は身を振じる
春時雨遠く見送る滑走路
遠ざかる長距離走者なごり雪
海苔の髪波にまかせたる浮き流し
草餅や草の匂ひの走り書き
朝食で海苔焼く父を思ひ出し
一枚の海苔を分け合ふ幸のあり

峰雄
いちい
く
敏江
美代
利子

第三例会（東京）

五明 昇報
曲淵 徹雄 報
雅夫

アイズニーランドの城に狼煙や海苔の舟
走り根の多き山道春の鶯

みどり

以上特選



頰紅を足し若返る古雛

田楽を商ふ訛祖谷の峽

見合ひより始まりし恋桜東風

田楽や皿も松の馬籠宿

寮歌また田楽の串振り上げて

居酒屋へ桂馬跳びずる春の泥

——以上特選

麦味噌もよけれ田楽噛みしめむ

梅月夜仙人仙女のささめごと

耳元でしやしやらりと春ピアス

盛りたての土あたたかし土竜塚

桜貝ひとつ手にのせくれし人

田楽や太鼓に酔ひし御師の宿

挿す串の田楽の香り愛づ人よ

春の川昨日とちがふ細濁り

のどけしや鳩に辞儀するあんよの子

雅夫

徹雄

昇

萬蝶

〃

〃

綾子

萬蝶

理恵

徹雄

大場順子

康世

岡野順子

雅夫

ほのぼのと女系三代お白酒

——以上特選

薔薇の芽や姉の真似して紅をさす

在宅の父の加はるお白酒

ばらの芽や恋のはなしは全て過去

銀色に錆びし古木の薔薇芽吹く

薔薇の芽や六文銭の上田城

薔薇の芽や少し覚悟のプロポーズ

細き指添へて注ぐや白酒を

貴人も伏す夢の魔力を薔薇の芽は

薔薇の芽や赤子の乳菌生えはじめ

白酒を供へて心安きかな

お白酒自づとはづむ童歌

水底の透ける早瀬や茨の芽

順子

——以上特選

翔太

光子

延昭

マスマミ

修

暦文

でん治

光弥

恵子

寛治

玲子

喜恵

春の雨一字一字の写経かな

薔薇の芽に夕日あつまり紅映ゆる

陽光につつまれ薔薇の芽立ちかな

春雨の街の喧騒かげりけり

相傘は恋のはじまり春の雨

春雨や万葉歌碑のけぶりたつ

——以上特選

若松例会（京橋）

正木萬蝶

石田慶子

月を

俊晴

千春

佐江

マスミ

理恵

慶子

萬蝶

——以上特選

春炬燵は膝を崩さない

春炬燵旧居の鴨居高かりき

夕間暮れまらなも出番の春炬燵

春炬燵ずばらな我を甘やかす

春炬燵定年を過ぎ粗大ゴミ

流し難苦労話は程ほどに

春炬燵未完のパスル置いたまま

仕舞ふべき日を葛藤の春炬燵

つまさきをそつとしのばす春炬燵

水尾

義子

玲子

紀子

理恵

佐江

——以上特選

月を

ひろこ

千春

理恵

鶴城

倭子

慶子

紀子

はるみ

——以上特選

春の雨ひさしへついと緋の蛇の目

薔薇の芽や華やげる日を待ちわぶる

春の雨ゆつくりとける蟠り

金婚の旅の薔薇園芽の勢

綾取りの琴の形や春の雨

薔薇の芽のくれなる映ゆる雨の糸

——以上特選

薔薇芽吹き石像少女天を突く

春雨や裾をはしよれば小走りに

はるみ

第四例会（浦和）

境延昭

石井喜恵

昇

〃

〃

玲子

恵子

光子

翔太

第五例会（浦和）

梅澤佐江

河野はるみ

理恵

紀子

水尾

美佐尾

義子

——以上特選

美佐尾

はるみ

若松例会（京橋）

正木萬蝶

石田慶子

月を

俊晴

千春

佐江

マスミ

理恵

慶子

萬蝶

——以上特選

春炬燵は膝を崩さない

春炬燵旧居の鴨居高かりき

夕間暮れまらなも出番の春炬燵

春炬燵ずばらな我を甘やかす

春炬燵定年を過ぎ粗大ゴミ

流し難苦労話は程ほどに

春炬燵未完のパスル置いたまま

仕舞ふべき日を葛藤の春炬燵

つまさきをそつとしのばす春炬燵

生返事すれど立たずや春炬燵
山笑ふ苦勞は敢へて糧とせり
春一番苦界浄土の波煙る
朝刊を取つて戻つて春炬燵
やりすごす夫の放屁よ春炬燵

儀勝 佐江
マスマミ 萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

貝寄風や男黙々漁網干す
貝寄風や御橋廊下の軋む音
託されし「木の名」を忘れ山笑ふ
三鬼忌のベレー帽ゆく北野坂
貝寄風やハングルの瓶漂着す
貝寄風や鳥の突端父祖眠る
貝寄風や実家は無人のまま古りぬ
亀鳴くや地球俄かに生ぐさし

和子 満耶子
千津子 玲子
道子 早苗
洋子 洋子
ゆら女 以上特選

和子

冷かしが本気となりし植木市
三度目のワクチン辛し春の塵

道子 満耶子

昔話あれこれ15

墨江中王の反逆

仁徳天皇崩御後、伊那本和氣王が天下を治めた。第十七代履中天皇である。新嘗祭の酒宴の時、天皇は酔つて眠ってしまった。皇位を狙っていた実弟の墨江中王は宮殿に火を付けて天皇を焼き殺そうとした。

天皇は中国系帰化人の阿知直に助け出され大和の方に逃げた。途中大坂山の入口（今の二上山北麓辺り）で、一人の乙女に出会った。乙女は「兵隊たちが大勢大坂山の入口を塞いでいます。当岐麻道（二上山南麓）へ迂回して行かれるのが良いでしょう。」と進言した。そのため天皇は石上神宮に逃げ延びた。

水歯別命の知略

そこへ、同じく同母弟の水歯別命が駆けつけて、拝謁を申し入れた。履中天皇は、「私は、貴方を墨江中王の同志ではないかと疑っているの、会う訳にはゆかない。」と断つた。水歯別命が「私には反逆心はございません。墨江中王の同志でもございません。」と言つと、「それなら墨江中王を殺してからおいでなさい。そうしたら必ず貴方に会いましょう。」と帰した。

そこで水歯別命は難波に引き返し、墨江中王の近習の隼人の曾婆加理を呼んで「お前が私の言うことに従つたなら、私が天皇になった時に、お前を大臣にする。そして共に天下を治めようではないか。」と持ち掛けると、「仰せの通りにいたします。」と答えた。

水歯別命は多くの品々を与え、「では、お前の主人を殺せ。」と命じた。曾婆加理は自分の主君の墨江中王が側に入った隙を伺い矛で刺し殺した。

各地句会



若狭水明会 (若狭)

梅の枝折れて余力の花白し
 梅が香やうどんに踊る花かつを
 春一番一気上がる重い腰
 老梅やまだ花さかす命持て
 梅が香や湖にしぶきのたたき網
 金盃派手に転がす春一番
 春一番やさしい友を道づれに
 老妻の踏ん張っている春一番
 山笑ふ卒塔婆起して帰りけり
 水明鬼石句会 (鬼石)
 囀りが囀り呼びて空真青
 岩間からしたたり落ちる春の水
 亀鳴くや夜は疼きし指の傷
 リモートの背景写るスイートピー
 遠目にも紫そまるほとけのざ

初花
 ことは
 鼓
 白鷺
 和風
 保人
 冬至
 郁子
 寛久
 和子
 ナヲ子
 紀子
 洋子
 聡子

水明小川句会 (小川)
 露の薑油の中を踊りをり
 春一番と言ふ傲りかな
 受験子に安堵の笑顔戻りたる
 取り出せば寝癖つきたる雛の髪
 新樹の会 (浦和)

俳聖の句碑の見守る磯遊び
 雪解水集めてダム力増す
 団地の子人工浜の磯遊
 単線の汽車を見送り磯遊
 四月から花丸増すや日記帳
 悪口を波が消し去る磯遊び
 大利根に影を落として雁帰る
 磯遊び砲弾の飛ぶ海の前
 蝌蚪の会 (浦和)
 相輪の空の伸びたる彼岸かな
 急坂の寺に詣づる彼岸かな
 記念樹の桜回廊踏み固め
 うつむける薬と見交はず桜かな
 見沼田の桜回廊七曲り
 ランドセル跳ねてゆくなり桜道
 広げたる句帳にひらり散る桜
 代々の古櫺を伐りて春寒し

きよ子
 みや
 綾子
 栄子
 徹雄
 正信
 道通
 平吉
 京子
 清吉
 鶴城
 風舎
 ひさの
 さち子
 礼子
 元美
 朝香
 るみ子
 しるく

希ふものとは停戦と桜かな
 終日の各駅停車遅日かな
 天守より桜見下ろす姪心地
 雛の会 (浦和)

二歳児はまねごとばかり囀れり
 水音のためまず聞こゆ露の薑
 早春の光を弾く大水車
 傷の猫雄雄しく帰る遅日かな
 天つ日にぼつぼつ開く桜草
 ぺんぺん草振れば昔のままの音
 あゆみの会 (浦和)
 筒抜けのややの産声牡丹の芽
 三月や淡き絵の具の水彩画
 牡丹の芽老いに負けじとピンとせり
 三月や土蔵の窓が開いてる
 三月や子の試歩日々延びてをり
 リハビリに勤しむ術後牡丹の芽
 野菊の会 (与野)
 チューリップ並びすぎたる疲れかな
 それぞれに来てそれぞれ砂浴ぶ雀春
 開け放つ待合室の春日濃し
 のどけしや翁嬸と村雀
 雀すずめ命あふるる春の庭

月を
 鶴城
 宣子
 燈女
 政代
 喜恵
 輝翠
 子アキ
 佐江
 重子
 和子
 山遊
 俱子
 啓子
 藻好
 美代子
 和子
 清子
 知子
 光子

櫻の会 (浦和)

指先に葉の香はんなり桜餅
桜餅子規の句碑よみ隅田川
城跡の政宗像や風光る

コロナ禍の心ほぐるの桜餅
出かけましょsuicaのペンギン風光る
ママ友と語りひ尺きぬ桜餅

口元のほころぶ遣影さくら餅
老いてなほ妻の健啖桜餅
お抹茶の苦きに生くる桜餅

天女舞ひ空青々と風光る
此の店の粹な客筋桜餅

山茶花 (浦和)

ひとり旅梅東風と行く京の路地
東風吹きて戸外で紅茶飲んでをり
東風吹くやけふは猫の日「2」の並ぶ

東風吹くやメ切気になる医療申告
東風吹くや富士は真つ白静かなり
夕東風の中走りゆく消防車

櫻蔭句会 (浦和)

柔らかな光編み込む春セーター
今年また裾上げほどく春の服
待合せ首元開けて春の服

明日発つ旅の鞆に春の服
旅人を迎ふるごとく山笑ふ
春服の熟女一行美術館

低山なれど眺望自慢山笑ふ
木造りの校舎竣工山笑ふ
柔らかな色を纏ひて山笑ふ

背筋伸べ羽織るピンクの春の服
水明熊谷句会 (熊谷)

裏山の保水ぐるりと花の寺
ちびつ子の奉納相撲春祭
風光る船よりおろす三輪車

鋤を入れ土黒黒と風光る
雲梯を渡る手に豆風光る
風光る人影絶えし関ヶ原

風光る子ども見守る横断旗
ほけぬと言ふ保証の欲しき花椿
鶴川山百合句会 (町田)

此処ら迄江戸前と云ふ海苔の粗朶
ひと時を眼瞑れば春浅し
死亡欄丁寧に見て浅き春

ひかりの中に身を沈めたし浅き春
先丸き眉墨削る浅き春
浅き春置かれしままのハイヒール

海苔干してそれぞれ嫁の話など
春浅し端切れいろいろ散らかして
錫婚式妻に感謝の春星を

切通し抜け早春の鎌倉へ

啓蟄や奈落せり出で見得を切る
ウクライナの平和を見たし春朧
啓蟄や路地に積みたる古雑誌
啓蟄の指先かるし髪むすぶ
沈丁花部活帰りの遠き道
啓蟄や阿修羅の如く胸開き
啓蟄を嗅いで転がす犬の鼻

公子
千恵
多美子
美智枝
由紀子

道子
幸代

和子
秀子
燈女
治江
栄子

徹平
正行
茂子

まりこ
粉雪
トエ
さよ子
夕峰
比早子
風舎

秘めたくも秘めきれぬもの沈丁花
見沼田の黄の拵がりや揚雲雀
啓蟄や錆びしバケツに残り水

りそな俳句会 (浦和)

床の間に名残のあられ雛納
ふる里の山膨らませ春一番
庭の隅春一番の置き土産

猫探すピラ宙に舞ふ春一番
裾裏のほつれをかがり雛納
雛納め座敷童へ客間開け

忘れ物春一番のバス停に
一日延ばし二日延ばしの雛納

鶴川山百合句会 (町田)

此処ら迄江戸前と云ふ海苔の粗朶
ひと時を眼瞑れば春浅し
死亡欄丁寧に見て浅き春

ひかりの中に身を沈めたし浅き春
先丸き眉墨削る浅き春
浅き春置かれしままのハイヒール

海苔干してそれぞれ嫁の話など
春浅し端切れいろいろ散らかして
錫婚式妻に感謝の春星を

切通し抜け早春の鎌倉へ

啓蟄や奈落せり出で見得を切る
ウクライナの平和を見たし春朧
啓蟄や路地に積みたる古雑誌
啓蟄の指先かるし髪むすぶ
沈丁花部活帰りの遠き道
啓蟄や阿修羅の如く胸開き
啓蟄を嗅いで転がす犬の鼻

月を
鶴城
京子

曆文
道を

久美子
寛治
雅夫
建治郎
京子
マシミ

雄二郎
月を
喜久
史代
広子
由美子
千春
理恵
美千子
玲子

芽吹句会 (浦和)

木々の芽のこぞりて四季の一楽章

啓蟄やどこかで虫の大欠伸

澆刺とビジネス街の木の芽かな

啓蟄や松の菰との御苑かな

奥の間に女将の活けし桃の花

母の日を「独活の太木」来て祝ふ

啓蟄の園児の散歩賑やかに

方寸の庭にも息吹木の芽張る

さざきサークル (浦和)

いと小さき山も山なり山笑ふ

ずつこけるお尻の重さ山笑ふ

ふるさとの遅い帰還や山笑ふ

父祖の墓ふところを抱き山笑ふ

つくしの香そつと微笑む八十路なり

つくしんぼはくがつこうにあがります

土筆野に紙飛行機が不時着す

土筆むく黒き指先見せ合ひて

若鮎句会 (浦和)

葉山葵のかすかにつんと山の膳

アルプスの水巡りゆく山葵沢

山葵田や二人の指は触れぬまま

落武者は知るや山葵の里の今

春分の雨やはらかき夕べかな

山葵田の水を守るや道祖神

猫の恋人の恋路を越えしかな

春分や子の手みやげを等分に

安曇野の風の清けし山葵沢

春分や三峰拝す禰宜の笏

人恋ふる猫の鳴き声黄水仙

山踏みや明るく暗く山葵沢

光が丘俳句教室 (東京)

背広着てブランコ揺らす昼下り

菜の花が人を呼び込む過疎の村

ふらこを譲つてくれし餓鬼大将

野ばらの会 (浦和)

忍城を囲みて騒ぐ木の芽風

春服の軽ろき手ざはり気も軽ろし

ファッション誌ちよつと真似して春の服

嫁に買ふマタニティーは春の服

指揮棒のひと振りを待つ木の芽かな

春服や紙ひかうきよ風に乘れ

和歌山水明句会 (和歌山)

渡し場に残る棒杓蚪蚪遊ぶ

店番と値段かけあふ植木市

パソコンに誤作動多し春の風邪

亮一

順

香音子

修

静香

月香

鶴城

喜夫

はる

康子

理恵

茂子

和子

栄子

夏江

秀子

みき子

貝寄吹く鴨の寝姿笛のやう

命がけの「人道回廊」冴返る

ビル火災目前に見る春の午後

ふつくらと幼抱くよな春キャベツ

円墳に坐すは不埒ぞ梅の花

ミモザの会 (横浜)

東風ふくや深川めしを食べに行こ

早春や墨跡太く掠れをり

長老もなべてお平ら春炬燵

外つ国の争ひの地に東風よ吹け

夕東風やイチゴショートの総くづれ

荒東風にゆらぎし恋の行方かな

梅東風や御籤は凶と書かれしも

青葉の会 (浦和)

春の山湖面を掠め飛ぶ鳥よ

露の臺天ぶらにして吾子を待つ

待ちわびし春のスカート足軽し

山桜見に期待ふくらむ旅の宿

揺れ動く紙漉き槽の水温む

花時の雨に君待つ喫茶店

水温み匂ひにむせる野草採り

京盆地囲む五山や春の山

水温む自生芹つみ鍋料理

手水舎や黄花香かせし水温む

千世子

満耶子

きわゑ

洋子

廸代

亜弥子

玲子

萬蝶

栄子

慶子

史代

千春

森山洋子

美紗子

真理

美智枝

美子

啓子

公子

和子

小川洋子

輝翠

水明松本句会 (松本)

節分に小さな声で「福は内」
ばく三つパパは二つさバレンタイン
口中にねつとり広がる石焼芋
弾くピアノ家中に満ち春來たる
芙蓉句会 (浦和)
大筆に墨汁たつぷり鳥曇
鳥曇最期会ひたき夫の顔
鳥曇クレーンは高層ビルの上
老いさらばふ上目に見るや鳥曇り
五番ホーム走る袴の卒業子
初恋や胸キュン今も鳥曇り
転勤の記念写真や鳥曇に
たかな俳句会 (川口)
木漏れ日を楽しむ吾に山笑ふ
亡き父の音なき夢や春コート
外出の春のコートのうすみどり
大地より湧き出し温み山笑ふ
ダム湖からの戻り道よし山笑ふ
のどけしや昭和の唄を巻き戻す
名水の滝に句碑あり山笑ふ
逝きし人なほまなうらに春コート
戻し汁加へまろやか花見膳

陽子
マリス
玲子
寿子
正子
道子
税子
ともこ
文子
美子
久美子
のり子
小麦
勢津子
和子
義子
鶴城
水尾
静香

阜月の会 (浦和)

末つ子も卒寿の春となりしかな
幸せな白寿の叔母や桜餅
雑仕舞ひ幸ありがたきひと日かな
春休みの子も翼持ちて飛ぶ
振り鉄や胸の高鳴る春休
改札で待ち侘びたるや春休
揚雲雀悲しき事も全て幸
雛の店家族総出の雛さだめ
花衣の会 (浦和)
風光る花壇に笑まふ陶の侏儒
切通しポトリポタツと椿落つ
里山に独り居の君やぶ椿
学帽に新たな徽章風光る
鳥巡り土産に買ふも椿餅
円卓の会 (浦和)
秩父嶺を行つたり來たり春の雷
春の雷小鬼の遊ぶ雲の上
水軍の鳥は城なり桜鯛
花冷えの外階段のハイヒール
意地みする尾鰭の反りや桜鯛
桜鯛と云はれ何気に食べにけり
春雷や父丹精の盆栽を

美佐尾
珪子
順子
紀子
静香
孝磨
曆文
さいち
みよ
みち
峯雄
治
章嘉
道修
翔太
輝翠
静香
月を
鶴城

水明漣つくし句会 (大阪)

一輪に一羽戯れ浅き春
別れの日セーラー服に忘れ雪
土匂ふ今日はここまでまた明日
冬の雲小さき命を折り重ね
うす暗き墓地に恋呼ぶ猫の声
モジリアニ裸婦大らかにチューリップ
俳句の手ほどき (岩槻)
春コンサート昭和歌謡の協和音
堰越ゆる水の煌めき茨の芽
アランフェス協奏曲や春うれひ
ふと力抜けたか薔薇の芽の赤き
春星へいざなふピアノ協奏曲
農協の入口出口苗木市
薔薇の芽や乙女が小さきイヤリング
防災の協議長引く籠の夜
薔薇の芽にそつと眩く人ありき
薔薇の芽や子犬に浅き刺され傷
薔薇の芽や花の色知る老婦人
卒業歌響く講堂協和なり
静やかに雅楽協和す春の宴
薔薇の芽を数ふる朝のうれしさよ
薔薇の芽や日々にくらむ胸の内

智恵子
美令
美人
富士桜
洋子
ゆら女
倭子
延昭
佐江
ます美
徹平
水尾
翔太
義子
忠男
卓郎
幸代
美子
桂子
久美子
かつ子

珊瑚の会 (浦和)

見送りは坂の下まで木瓜の花
木瓜咲くや地図より消えし母の里
陽炎や都電が宙に浮いてゐる

喜 恵
マスマミ
水尾

陽炎や脱ぎて駆け出す放れ駒
陽炎や老女五人のおままと

恵 子

この畑牛舎につづく木瓜の花
陽炎や彼方に潜む脱走兵

光 子

木瓜満開笑ひはじける女学生
木瓜の花我が手に静脈浮き上がる

史 代

更紗木瓜古家に添うて半世紀
陽炎へ突つ込んで行くオートバイ

和 子

裏口は一人の幅よ木瓜の花

節 代

神戸大池句会 (神戸)

鳥雲にイスラム寺の青ドーム
マスクして上目使ひの人は誰

玲 子

梅が香の葉風にのりて季を知らず
ばら寿司を囲む団欒の夜

礼 子

コクーンシティカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

三輪車春泥めざしまつしぐら
春泥に心許なきハイヒール

延 昭

雨音に春を身籠る雑木山
人住むを大地と言へり春の泥

俊 晴

美 枝子

俱 子

お河童のはいちもんめ木の芽垣
記念樹の今年も芽吹く校舎跡
飛び跳ぬるちつちやな足跡春の泥

春一番伊達の帽子を鷲掴み

りんどう俳句会 (浦和)

啓蛰や庭師ら松の孤を焼き
平癒願ひ通ふ社の初桜

仰ぎ見る希望の一輪初桜
山の辺の古墳静かや初桜

啓蛰のホース暴るる洗車かな
啓蛰時の鐘鳴る小江戸かな

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

見上ぐるや三三五五に初桜
啓蛰の土の下より焼夷弾

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

啓蛰の土の下より焼夷弾

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

初桜見上げ稚児の目透き通る
啓蛰や地下の書庫より人の声

正 信

早都子

昇

君 夫

サヨ子

紀 子

利 子

徹 雄

卓 郎

弘 夫

治 子

翔 太

正 信

寛 治

順 子

謙 一

智 子

はるみ

敦 子

美 智

真由美

真由美

真由美

真由美

真由美

真由美

真由美

真由美

真由美

雁行きて小さき悩み限りなく
お彼岸や供花なき墓の海辺故郷
花に酔ふ地球の裏へ続く空

書き出しの決まらぬ句帳宮桜

柿の木塾 (浦和)

長閑けしや爪のひとつを塗り忘れ
のどかなる御幸の浜や波の音

機嫌よき鳶の笛や里のどか
曳網に鮎子跳ねて朝の浜

のどかさや蔵町しづかに時の鐘
のどけしや買ふでもなしに道の駅

五つ玉の父のそろばん長閑けしや
のどけしやしやべる目販機貸ボックス

喰はず嫌ひの鮎子白魚初詣子

恵 子

俊 晴

かつ子

水 尾

和 葉

節 代

光 弥

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

風 声

○現代俳句三月号——「現代俳句の風」欄

枝に風幹に矢印大試験

疑の眼集まる春氷

上田縞の機音軽し山椒の芽

無住寺に遺る弾痕余寒なほ

童謡を流し余寒の灯油売

野鼠を仕留めて降らす花吹雪

○天塚（宮城昌代主宰）三月号——「珠玉一句」欄

煤逃やかつて愛國婦人会

○沖（能村研三主宰）三月号——「沖の沖」欄

陽炎の待つ文豪の散歩道

○駒草（西山睦主宰）三月号——「新着俳句の本棚」欄

燕にも五代の家格蔵の街

○くぢら（中尾公彦主宰）三月号——「受贈俳誌美術館」欄

軍神の妻の遺影や寒卯

○幻（西谷剛周主宰）三月号——「受贈誌拝見」欄

築地塀落葉に肩を貸すごとく

○雲取（鈴木太郎主宰）三、四月号——「百花風声」欄

鈴木太郎主宰が句集「マネキン」から一句鑑賞

踏青やアキレス腱はまだ達者

踏青は中国の清明に繋がる行事であるという。先頭を切

○新月（松田碧霞主宰）三月号——「現代俳句鑑賞」欄

つて健やかに青草を踏むのはトロイの勇者のようだ。

州浜ゆき氏による「水明」一月号「逃げる」より一句鑑賞

雪明り「山と川」てふ合言葉 鬼之介

「合言葉」とは、火と水、土と風のように前もって打ち

合せておく忍者や戦闘時の言葉の符牒。一説によると年末

定番の「忠臣蔵討入り」も山と川の符丁と言われている。

また山川の「三」は、調和のとれた縁起良い文字とされて

いる。例えば三種の神器や三位一体などのように。因みに

「一」の符丁はピン、ヤリで孤立を、「二」は対立を意味す

ると言う。

作品の雪・山・川のイメージは日本の原風景そのもの、

雪の山国や雪の山河の静かな風景が鮮明にイメージされる。

忠臣蔵はさておき、雪と山と川の文字の視覚的な清浄感。

合言葉の着想に感じ入る。

○新月（松田碧霞主宰）三月号——「受贈俳誌紹介」欄

シリウスや夢を捨てざる隼船

○太陽（吉原文音主宰）三月号——「受贈誌御礼」欄

築地塀落葉に肩を貸すごとく

○玉梓（名村早智子主宰）三、四月号——「他誌拝見」欄

葛湯吹く少女よ愛し盛りかな

○菜の花（伊藤政美主宰）三月号——「諸家近詠」欄

煤逃やかつて愛國婦人会

○山彦（河村正浩主宰）三月号——「諸家近詠」欄

煤逃やかつて愛國婦人会

○笥（山本一步主宰）三月号——「受贈誌の一句」欄

一切が霧遠ざかる櫂の音

横山君夫

○好日（高橋健文主宰）三月号——「俳誌月評」欄

北村土守氏により「水明」十一月号（通卷一〇九四号）

の鑑賞

主宰山本鬼之介。昭和五年九月、長谷川かな女が現・さいたま市浦和区で創刊。季語を入れて自己の個性を活かした俳句を詠む。

千夜一夜（作品）

一の糸替ふる仕種のさやけしよ

所轄署の刑事の杞憂秋の声

企みのありさうな椅子秋の昼

月下美人（近詠）

月下美人ひと夜飲み干す貴腐ワイン

稲つるび（近詠）

稲妻の香取鹿島を両参り

硯箱（季音九月号、井口俊晴選）より

冷奴はさむ螺鈿の若狭箸

差し覗くカーブミラーに夏の雲

バス停は合歓の花影鯖街道

季音抄（山本鬼之介選）より

深みゆく秋色チェロの四重奏

幾筋の大河のうねり小鳥来る

萩の風阿弥陀坐像に跪く

山城のはるかに見えて衣被

八千草を活けて野の風生れけり

マジシャンの手よりコインが出てて秋

山本鬼之介

石井喜恵

五明 昇

柚木治子

西山貴美子

鳥羽和風

山中みどり

由良ゆら女

森本早苗

宇田白鷺

井上玲子

熊倉千重子

糸電話片方持たせ門火焚く
 羅の膝を占めたる下がり猫
 ダイビング翡翠を撮る豆博士
 魂送り元の二人の八畳間
 味を愛で粋な名を愛で長十郎
 御河童は口が達者よ鳳仙花
 晩夏光任地離るる船の水脈
 「水明」は各地で三十六の句会を開催、インターネット句会も開催。「昔話あれこれ」は古代史の解説、今回は神功皇后、応神天皇を紹介。「今月のはてな」は今月号で使用された「羅宇」「遺芳」等の難読漢字の解説で作句の参考になる。

（日高道を抄出）

橋本京子
 曲淵徹雄
 保坂翔太
 新 曆文
 原田秀子
 染谷正信
 横山君夫

水明発展基金御礼

（敬称略）

— 令和四年三月三十一日現在 —

池田雅夫	5	口	五明	10	口
丸山マシミ	5	口	神田治江	20	口
岡野順子	10	口	匿	1	口
多根敏江	5	口	匿	24	口
井上燈女	5	口			
新井孝磨	2	口			
— 合計 87 口 —					

誌代等のお支払いについて

平素は水明俳句会の運営に格別のご協力を頂き誠に有難うございます。

当結社の運営は、皆様からお預かりする誌代等（水明誌代・同人費・季音同人費）によって賄われております。

誌代等は、6か月または1年分を前納していただくようお願いしております。

今月号に「郵便払込取扱票」の用紙を添付しておりますので、ご送金の際にはご利用ください。（毎年5月号及び11月号に添付いたします）

皆様から誌代等をお支払いいただいた際には、領収のご案内葉書をお送りしておりますが、その文中に、誌代等のお預かり期間を記載しておりますので、次回のお支払いのご参考にしてください。

以上、よろしくお願い申し上げます。

令和4年5月

水明俳句会総務部長 日高 道也

最近の 座談会 名句集を探る

司会 筑紫磐井
大西 朋
しなだしん
西山ゆりこ

小島 明 『天使』
相子智恵 『呼応』
佐藤智子 『ぜんぶ残して湖へ』

▽巻頭三句

柿本多映

加古宗也

森田純一郎

波戸岡旭

山本比呂也

浅井民子

▽今月の華

二川茂徳

山田関子

▽俳句と短歌の10作競詠

福田若之

谷川電話

▽今月のハイライト

「万象」『俳句春秋』

「芸芸塔」『夕風』「軸」『風叙音』

▽好評連載

南 伸坊

ねこはら

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ

俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

神作研一

てのひらの江戸

― 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮 一雄

一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2022年6月号

5月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

水明創刊90周年記念祝賀会 水明1100号記念全国大会 のご案内

2年間繰り延べてまいりました念願の水明創立90周年記念祝賀会を、水明1100号記念全国大会と共に開催する運びとなり、ここにご案内申し上げます。前年は公共の施設を上手く使用できましたが、本年度は会場の手配が困難を極めました。加えて諸物価高騰の昨今、会場となるホテルでの諸経費も連動しております。実行委員会と致しましては、発展基金からの補填も視野に入れて予算を組みました。誌友・同人・季音同人の皆様にはご理解の程よろしくお願ひ申し上げます。

■水明1100号記念全国大会

日 時 令和4年7月6日（水曜日）
受付開始 12時30分 開会13時 閉会16時30分
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和4階「ロイヤルプリンセス」
〒336-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1 TEL048-827-1111
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・山紫賞・鼓笛賞の授賞、
新誌友紹介者の表彰、季音同人、新同人の紹介、兼題入選句
の発表と授賞、講評等。

■水明創刊90周年記念祝賀会

日 時 令和4年7月6日（水曜日）
受付開始 16時30分 開会17時 閉会19時
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和4階「ロイヤルクラウンBC」
行 事 来賓ご挨拶、アトラクションなど

■参加費（水明85周年記念全国大会より減額）

記念全国大会・記念祝賀会 25,000円（フルコース宴食付）
記念全国大会のみ 5,000円（コーヒー付）
記念祝賀会のみ 20,000円（フルコース宴食付）

■申込締切

令和4年6月15日（水曜日）
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

※なお、参加費を振込にて別途送金される方は、指定「申込書」の「申込金支払方法」の振込をチェックしてください。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎減多に無い貴重な機会です。永年会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

水明創刊90周年記念祝賀会・
水明1100号記念全国大会実行委員会・実行委員長

水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題 「行く春」(ゆくはる) 春の名残・春のかたみ・春の行方・春の別れ・春行く・春の果

「燕」(つばめ)

初燕・つばくらめ・川燕・里燕・群燕・夕燕・燕来る

※「行く春」「燕」は右の季語で詠む事

「大」詠込み

※「大」は季語として使わない事。春の季語を入れて詠む事。

例句 囀をこぼさじと抱く大樹かな 星野立子

大いなる春日の翼垂れてあり 鈴木花蓑

句数 通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料 一組につき千円。

締切 五月十日(発行所必着)

※投句用紙(水明三月号・四月号に添付)使用のこと。コピーも可。

後記

五月号は恒例の水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、それに今年から新設された山紫賞、鼓笛賞を加えた六賞の方々の受賞のお喜びの声を特集しました。

全国大会は、本号一〇頁にご案内の通り、バインズホテルにて開催致します。四月号では、パルコで大会を催し、ロイヤルバインズホテルで祝賀会とお知らせ致しました。しかし、大会も祝賀会もバインズホテルとなりました。両方ともバインズホテル開催では、いささか会費が高みですが、九十周年、一〇〇号記念のお祝も兼ねて、来賓の方もお招きしていただきますので、どうぞ、ご参加して頂きたいと思ひます。

皆様にご投句頂いた一一〇〇号を祝ぐ「水」「明」の二句を今月号に掲載しました。多くの会員の方にご参加頂きありがとうございます。一口に一〇〇号、九十

周年と言いますが、昭和五年に長谷川かな女初代主宰が水明を創立し今日までには、第二次世界大戦やら、様々な事を経て、代代の主宰と会員が懸命に守つて来た証しだと思ひます。全国には俳句結社は山ほどあり、月刊誌や季刊誌を発行しています。しかし、水明のように長く続いている結社はいくつもありません。これからも水明人は百周年を過ぎし一歩一歩進みましようね。

最後にお詫びです。四月号の巻末の投句用紙季音・水明集の締切四月二十五日を三月二十五日。山紫集の四月の兼題を七月の兼題と間違えて表記しました。誠に申し訳ございませんでした。会員の皆様には、さぞ戸惑つたり、悩んだりなさつた事と思ひます。本当に申し訳ございませんでした。全国大会の兼題句の締切は五月十日で間違ひございません。御応募お待ちしております。

(節代)

今月のはてな？

- 瞰(みる)
- 黄心樹(おがたま)
- 自由無礙(じゆうむげ)
- 接骨木(にわとこ)
- 木耳(きくらげ)
- 花木筆(はなもくれん)
- 胼(たこ・胼胝)
- 裏(つつ)む
- 竦(すく)める
- 鮎(いかなこ)

106 89 81 78 42 ♪ 41 31 13 12 頁

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)
時間：12時半～午後4時半
(火・木・土・日・祭日は休み)
水明の行事と重なった時は休み
(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和四年五月号
通巻一〇〇号
令和四年五月一日発行

発行人

山本 鬼之介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二-八
電話 048-886-1600三

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四一〇二二
電話 048-822-474一

誌代

半年分 六、〇〇〇円

同人費

一年分 一、二、〇〇〇円

季音同人費

(誌代を含む)
一年分 二、四、〇〇〇円

振替

一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇〇一五三三九三

印刷所

中央美版

水明創刊90周年記念祝賀会・参加申込書 水明1100号記念全国大会

〈申込締切 6月15日(水)〉

- | | |
|-------------------|------------|
| 1. 記念全国大会・記念祝賀会参加 | 会費 25,000円 |
| 2. 記念全国大会のみ参加 | 会費 5,000円 |
| 3. 記念祝賀会のみ参加 | 会費 20,000円 |

※上記の希望項目の数字を○で囲んでください。

~~~~~

上記参加費を添えて申し込みます。

※なお、参加費を振込で別途送金される方は、下表の「申込金支払方法」の振込を○で囲んで下さい。

2022 年      月      日

|         |    |        |          |
|---------|----|--------|----------|
| 住<br>所  | 〒  |        |          |
| 氏<br>名  |    | 電<br>話 | (      ) |
| 申込金支払方法 | 現金 | 振込     |          |

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)  
水明俳句会





山紫集

八月号 五月二十五日締切

氏名(番号)

五月の兼題 「亀の子」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って  
使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢

## 季音抄

山本鬼之介

春寒や個個に母あり無言館  
貝寄風や神慮にかなふ子安貝  
青天井目ざし風船一人旅  
読み返すかな女の調べ水温む  
春闘の尖りすぎたるピラの文字  
令和も四年白虎の西へ桜東風  
花時雨衣紋繕ひ小走りに  
雛市や東くだりの雛箆筒  
長閑なる御幸の浜の波の音  
アランフェス協奏曲や春うれひ  
薔薇の芽のくれなるすでに妃の気品  
回転ドアまづ風船の飛び出せり  
奥の間に女将の活けし桃の花  
背を押す時の鐘鳴る夕霞  
風光る人影絶えし関ヶ原  
ひらがなの名札の光る春の服  
夕東風やイチゴショートの総くづれ  
春の雨我を誘ふ縄のれん

石山かつ子  
大橋廸代  
大村節代  
小倉倭子  
栢尾さく子  
菊池ひろこ  
藤澤喜久  
山田美佐尾  
井口俊晴  
梅澤佐江  
大場順子  
丸山マシミ  
熊倉千恵子  
田中章嘉  
近藤徹平  
大塚茂子  
石田慶子  
河野はるみ

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内

(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内

(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

春浅し前頭葉が武者震ひ  
 草萌ゆる父の墓より母よぶ声  
 陽に透けて花片はルビー寒椿  
 春浅し色付け前の土人形  
 日と月の恋の鞘当て春の潮  
 春の日の水平線を探しをり  
 兄嫁の久留米緋に春の雪  
 春光の小川さざめく和紙の里  
 春寒し蔵に残りし通信簿  
 オルゴール鳴らせば義姉を朧月  
 春の野へ牛追ひ立つる牧舎かな  
 泰平の世の古戦場水温む  
 酒蒸しの汁までする浅蜷かな  
 冴返る碧天を刺す避雷針  
 荒海やなだりに映ゆる冬椿  
 野仏をすつぽり包む野火の渦  
 紅梅や選挙ポスターみな笑顔  
 畦を焼き缶コーヒを一気飲み

染谷正信  
 渋谷きいち  
 山岸久美子  
 横山君夫  
 反町 修  
 元田亮一  
 村杉清吉  
 越田栄子  
 梅澤輝翠  
 橋本京子  
 西幅公子  
 丸屋詠子  
 檜鼻ことは  
 曲淵徹雄  
 保坂翔太  
 原田秀子  
 新 曆文  
 笹本啓子

| 水明例会案内 | 句会名  | 日 時       | 会 場                      | 指 導 者 | 幹 事            |
|--------|------|-----------|--------------------------|-------|----------------|
|        | 第一例会 | 第1日曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 茂木和子<br>境 延昭   |
|        | 第二例会 | 第3金曜・午後1時 | 本所ビッグシップ                 | 網野月を  | 山田みどり<br>太田 絹映 |
|        | 第三例会 | 第1月曜・午後1時 | 京橋区民会館                   | 山本鬼之介 | 五明昇<br>曲淵徹雄    |
|        | 第四例会 | 第1木曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 椎野美代子 | 境延昭<br>石井 喜恵   |
|        | 第五例会 | 第3火曜・午後1時 | 水明発行所                    | 山本鬼之介 | 梅澤佐江<br>河野はるみ  |
|        | 若松例会 | 第1土曜・午後1時 | 京橋区民館                    | 山本鬼之介 | 正木萬蝶<br>石田慶子   |
|        | 関西例会 | 第3日曜・午後1時 | 守口市文化(セ)                 | 大橋勉代  | 森本早苗           |

水 明

令和四年五月一日発行 毎月一日発行

(第九十五卷 第五号)

定価 一〇〇〇円